

第二回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集う—
いまここにも開いている民話の入口—『サルカニ合戦』をめぐる—

目 次

1. 「民話 ゆうわ座」について	進行 小田嶋 利江	p.3
記録 河井 隆博		
2. 「サルカニ合戦」を聞く	語り 柴田 民雄	p.5
記録 島津 信子		
3. 感想や意見の交換 1		p.9
記録 島津 信子		
4. 話題提供 「サルカニ合戦」とその類話から学んだこと	話題提供 小野 和子	p.15
記録 河井 隆博		
5. 伝承の語りによる記録映像の上映		p.27
記録 山田 裕子		
6. 感想や意見の交換 2		p.35
記録 山田 裕子		

第二回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江
	語り	柴田 民雄
	話題提供	小野 和子
	板書	島津 信子
	会場	加藤 恵子・河井 隆博・山田 裕子
〈記録〉	文字起し作成	河井 隆博・島津 信子・山田 裕子
	梗概作成	小田嶋 利江

* 担当者はすべてみやぎ民話の会会員

せんだいメディアテーク 考えるテーブル
第二回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集う—
いまここにも開いている民話の入口—『サルカニ合戦』をめぐって—

○開会挨拶

吉田 絵理(せんだいメディアテーク)

今日はお集まりいただきましてありがとうございます。

私、せんだいメディアテークの吉田と申します。よろしくお願いいいたします。

本日は、「考えるテーブル 民話 ゆうわ座 第2回、『サルカニ合戦』をめぐって」というタイトルで行ってまいります。

この「考えるテーブル」は、震災復興や地域社会、表現活動などについて、参加いただいている皆さんと対話をしながら、みんなで楽しんでいきたいと思いますという場所になっています。

マイクをこちらのテーブルと、それから、こちらのテーブルにもおいてあります。どんどん回していきますので、皆さんでどんどん話していけたらなあと思っています。

民話 ゆうわ座は、みやぎ民話の会「民話 声の図書室プロジェクトチーム」の皆さんと行ってまいりました。

今日の進行は、みやぎ民話の会さまに進行していただきます。

今日は三時間の長丁場、四時半までノンストップで休憩無しで行います。

出入り自由ですので、ときどき、お水飲まれたり、お手洗いはそちらにございますので行っていただいたり、後、座りっぱなしになってしまいますので、足を動かすとか、ちょっと工夫して頂ければと思います。

今日のテーマは、『サルカニ合戦』。

なじみ深い、皆さんが知っていらっしゃるお話だと思うんですけども、いろんなお話が聞けるとと思いますので、ぜひ、楽しみにして下さい。

最後に、今日の対話の様子、それから発言の内容、写真、音声とか、映像を見て個人が特定されない範囲で記録、活用させていただきたいと思っております。当館のホームページですとか印刷物で伝えていく形になります。

万が一、ここの発言は使わないでほしいですとか、そういったご要望がありましたら、終了後に私までお声がけください。

お待たせしました。ここからは、みやぎ民話の会様にお願いいいたします。

よろしくお願いいいたします。

記録 河井 隆博 (みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

1. 「民話 ゆうわ座」について

進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

皆さま、こんにちは。

一昨日、昨日まで、だいぶ天気が思わしくなかったんですが、今日は本当にいい天気になり、爽やかな日になりました。

「民話 ゆうわ座」に、こんなにたくさんの方々に来ていただきまして、本当にありがとうございます。

私は本日の司会進行を務めます、みやぎ民話の会の小田嶋と申します。三時間の長丁場になりますけれども、どうぞよろしく願いいたします。

今、せんだいメディアテークの吉田さんからもご案内があったように、ここの場は、民話について、一つの民話を取り上げて、それをつくづくとあらためて眺めてみて、それについて聞いて、語って、考えて、それを元にして、また、語って、聞いて、考える、そういう集いなんです。

誰でも自由に入退きしていただけますし、それから、どんなことでも、一人一人が感じたこと、考えたことを、本当にさもないことでもいいので、それをそのまま自由に皆さんに聞いて、語っていただければと思っています。

一回目にお出でいただいた方にはくり返しになりますが、今日のこの集いの名前から、ちょっと説明させていただきます。

この集いは、「民話 ゆうわ座——話に遊び、輪を結び、座に集う——」という名前がついています。

「民話」という言葉は、よく耳にするし、何となく分かっているような言葉ですけれども、いろんな人によって、いろんな意味に使われています。

わたしたちが「民話」という言葉にこめているのは、ある特定のお話とか物語のことです。そのお話は耳で聞かれて、それが口で語られて、さらに、その口で語られたものが、また耳で聞かれてというように、次から次へと口から耳へ耳から口へと語りつがれていく、そういう物語です。

ですから、そのお話というのは、文字で書かれて伝えられているお話だけには限らないんですね。声を中立ちとして語りつがれていくような、文字だけのお話よりもっと広くて、あるいはもっといろんなことが含まれていて、声によって伝えられてきた物語と言えらると思います。

そうした民話の世界というのは、よく深い森に譬えられています。なぜならば、耳で聞かれ口で語りついで伝えられてきた物語ですから、語りついできた非常に多くの、何代も前の先祖からのさまざまな思い、現実の苦しきみですとか、得がたい知恵ですとか、深い思いや切ない願いですとか、そうしたものがたくさん、たくさん、一つ一つのお話にこめられているのではないかと思います。

そのためか、お話の種類もたくさんありますし、一つのお話についても、それぞれの語り手で、それぞれの思いが込められていたりします。

そういう語り伝えられた物語について、一人一人が聞いて、語って、考える集いが、今日のこの、「民話 ゆうわ座」です。あらためて考えてみますと、そのようにして語りついできた民話というものは、広い意味で、ここの場でも、聞いたり、語ったりして伝えていくことで、また未来へ、次の世代へと伝えられていく可能性があるのではないのでしょうか。

ですから、今日のこの場も、こういう集いも、そういう語りつがれてきたずうーっと長い流れの、一番はしっこにでも位置づけられるかもしれません。もしそうであるなら、とっってもうれしいなと思って、そういう願いをこめまして、「話に遊び、輪を結び、座に集う」という名前をつけました。

その、ゆう（遊・結）、わ（話・輪）というのを取って、「ゆうわ座」としています。

そして願わくば、話を語ったり、聞いたり、考えたりすることで、ここに集った人たちの結びつきが生まれて、同じ一つの座に集うことができればよいという願いが「座」にはこめられています。

今回はその二回目ですが、「今、ここにも開かれている民話の入口—サルカニ合戦をめぐる—」という題のように、サルカニ合戦という、よく知られた一つの昔ばなしを取り上げます。

民話は深い森のようだとおっしゃいましたが、深いからといって、その入口がとっても昔のはるか遠くにあるのではないと思います。

実は、今ここの身近な足元にも、その入口は開いているのではないかと。

そこで、「サルカニ合戦」という、みんながよく知っていると思っているお話をあらためて取り上げます。声を仲だちとして語り伝えられてきた、声の伝承の語りを聞いてもらって、見てもらって、「サルカニ合戦」というのは、どういうお話だったのか、そこにはどんな思いが込められているのかについて、あらためて考える場になればよいなあと思います。

そのためには、まず皆さんと一緒に、「サルカニ合戦」って、一体どんな話だったんだろうというのを、あらためてたしかめたいと思うんですね。

皆さんがよく目にし、耳にする「サルカニ合戦」にとっても近くて、そして、優れた伝承の語りとしての「サルカニ合戦」を今から語っていただきます。

それを聞いて、ここが分からなかったとか、ここがとっても心に残ったとか、ここが面白かったとか、どうしてこんなふうになっているんだろうとか、今まで思ってたのとちょっと違ったとか、そういう、わずかばかりの印象でも、それから、分からないことでも、ちょっとでも考えたこと、感じたことがあったら、何でもいいので自由に出していただきたいと思います。

今から「サルカニ合戦」を語っていただきますが、その元の話というのが、山形県西置賜郡小国町という、飯豊連峰の山奥の、そのまた山奥の一番奥の集落に生れて、生きて、亡くなられた佐藤とよいさんという、とても優れた語り手の「がにっこの仇討ち」というお話です。これは「サルカニ合戦」という名前ではないんですね。とよいさんは「がにっこの敵討ち」と言って語ってくださいました。

それを、今日は、みやぎ民話の会の仲間である柴田民雄さんに語っていただきます。

実は、柴田民雄さんは、このとよいさんの昔ばなしに、心底惚れこまれて、小野和子先生がまとめられた、そのとよいさんの民話集『山形県飯豊山麓の民話—いいでさんろく長者原老媪夜話—』の一字一句をととても大切に、一字一句ゆるがせにせず、二十数年のあいだ語ってこられた方です。

声の語りとして、「がにっこの敵討ち」を、耳を澄ませて、まず味わっていただきたいと思います。では柴田さん、よろしくお願ひします。

記録 河井 隆博(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

2. 『サルカニ合戦』を聞く

語り 柴田 民雄 (みやぎ民話の会)

柴田一みなさん、こんにちは。みやぎ民話の会の柴田民雄です。柴田郡柴田町の柴田民雄といたします。どうぞよろしくお願ひします。

小田嶋さんが、あんまりすごいこと言ったんで、おれ、困りだけけども。でも、とよいさんに出会ってから、語るようになりました。それは、小野さんの講演を聴いて、25～30年近くになりますか。で、小野さんからとよいさんを知ったというわけです。じゃあ早速、「ガニっこの敵討ち」というお話を聞いてもらいます。

『ガニっこの敵討ち』 佐藤とよいさん (山形県西置賜郡小国町 明治34年生) の語りをもとに

とんと、むがす、あつたけどやれ。

むがし、ある山に、サルとガニ、なんぼかいで、暮らしていだどやれ。

ある晴天の日に、ガニっこの、沢からはいではつたば、だれか、そこで、^{ちゅうはん}昼飯でも食つたんだが、^{こびる}小昼でも食つたんだが、にぎりめし一づ拾つたじもの。

「ああ、いがつた、いがつたあ。はやぐ、水のあるどごさ行って、このにぎりめし食うべ」ってつたば、やぶ原がら、がさがさど、サル、出はつて来たど。柿の種、なめなめしてな。

「ガニっこの、ガニっこの、いいもの拾つたなあ。おれも今日、いいものひろつたはや。柿、拾つて食つてきた。いやあ、この種植えて、実いなつたば、なんぼが、食いたでなんねえべや。どうだ、ガニ、その、にぎりめしと柿の種、取っ換えっこしねえが」

そうしつと、ガニっこのは、もともと、柿好きなもんだがら、

「あんまりいい、いい。そんなら、とりかえるが。にぎりめしは、今、食えば無くなるし、柿の種植えておけば、あとになつてためになる」

つて、サルのなめた柿の種とにぎりめし、とつかえてしまつたじもの。

そうして、畑さ持つていって、柿の種、植えたと。そうして、ひしゃくッコ、水汲んでいって、

「はやぐ、^お生えれ、はやぐ、^お生えれ。生えねえづど、^ほ掘つけすど」

「^お生えれ、^お生えれ、^お生えれ」

つて、3日も、4日も、一週間も水かけに行つたば、ある朝げ、ちょこんと芽え出はつたじもの。

今度あ、また、

「はやぐ、^お生がれ、はやぐ、^お生がれ。生がらねえづど、ハサミ切るど」

「^お生がれ、^お生がれ、^お生がれ」

つて言つていだけば、見でる間に生がつて、伸びていぐじもの。

「いやあ。これはいい。見込みある」

つて、今度あ、柿の木、毎日行って、

「はやぐ、なあれ、はやぐ、なあれ。ならねえづど、はさみ切るど」

「なあれ、なれ、なあれ、なれ」

つて言つて、肥やしかければ、実がなるようになったじもの。さあ、そうすつとガニっこの、毎日、柿の木の下さり行つて、青い柿見て、

「はやぐ、^え熟めえ、はやぐ、^え熟めえ。^え熟まねえづど、はさみ切るど」

「^え熟んめえ、^え熟めえ。^え熟んめえ、^え熟めえ」

つて行って、はねだば、ある朝げ、真つ赤に^え熟んだじもの。

「いやあ、これはいがったあ。これは、いがったあ」

したば、登られるか。登らんねえか。わさわさ、わさわさと登っていぐども、二尺も登るとは、ぱたんと落ち、また二尺も登るとは、ぱたんと落ちして、その枝まで行き着かれねえじもの。せっかくなつた柿、もぎてえども、食いでえども、なんともしゃあねえじもの。

そうしたごさ、サルがちくしょう、来たどお。

「ガニっこ、ガニっこ、なにしてだ」

「俺なあ、おめえと取替えた柿の種、植えたば、こんなにみごとになったどもがしゃ、もいで食われねえんだよ。登るとは落ち、登るとは落ちして、だめなんだあよ」

って言うと、

「ああ、そんなの、雑作ねえ。で、俺がもいでくれる」

って、ちょこちょこつと登って行って、赤げなうまい柿、もいでは食い、もいでは食いして、いつまでたっても落としてよこさねえじもの。

「サルどの、サルどの、俺にもひとつ、くれ」

って言うと、

「ほい」

って言って、しったぎ、ぶつとひっかけて、

「ほら、食え」

って。

「サルどの、サルどの、しったぎなどひっかけねえで、うめえの一つ、くれ」

って言うと、今度あ、鼻汁、ふーんど引っかけて、

「ほら、食え」

って。

「サルどの、サルどの。なんぼ俺だつて、鼻汁ひっかけだのは、食いだくねえ。うめえのくれ」

って言うと、今度あ、一つもいで、

「おいおい、あんまりいい」

って、しょんべんたつて、ひっかけてくつだど。

「サルどの、サルどの、なんぼおれだつて、しょんべん引っかけだ柿は食いでくねえ。うめえのくれ」

って、言ったら、今度あ、屁え、ぶつとたつて、けつつの穴さべつとつけで、

「そうら、食え」

って。

ガニっこ、あぎれはでで、ごっしゃいだじもの。

「なんぼ言つても、うめえのくんねえごつたら、おれの木だがら、下りてくれ」

そうすつと、サル、

「やがますい。このやろう」

って、まあだ、熟まねえ、青い実もいで、ガニの甲羅ねらつて投げだじもの。ガニっこ、びしゃあつとつぶされてしまったどお。そうすつと、おなごガニであったもんで、ガニの子ども、はい出したじもの。

子どもガニは、沢さ入つて、

「おっかあ、死んだ、おっかあ、死んだ」

って泣いだどやれ。そうして、いつか、サルのばんばさ行つて、あのサルどこ、殺してくれっぺど思つて、なんぼが考えたもんだと。

しばらくして、ガニっこだち、おっきぐなって、大人のガニになると、
「サルのはんばさ、行ってみっぺ」

て、わさわさ、わさわさで行ったど。

したば、クリがころころ、ころころ、ころげで来たじもの。

「ガニっこ、ガニっこ、どさ行くばあ」

つつだど。

「サルのはんばさ、親のかたき、とりだくて、行くあんだあ」

「よしよし、おれも、助太刀に行く」

って、クリ、助太刀にではったど。

そして、行ったば、今度あ、ハチが飛んできたじもの。

「ガニっこ、ガニっこ、どさ行くばあ」

って。

「サルのはんばさ、親のかたき、とりだくて、行くあんだあ」

「よしよし、おれも手伝いに行く」

って、ハチ手伝いにはったど。そうして、クリとハチとガニっこで、サルのはんばさ向かっていったば、こんど、ウスが転んできたじもの。いやあ、ウスの下に入っては大変だと思って、みなよけだど。したば、ウス止まって、

「ガニっこ、ガニっこ、どさ行くばあ」

って聞くじもの。

「サルのはんばさ、親のかたき、とりだくて、行くあんだあ」

「よし、よし、いいごと聞いた。おれも手伝いに行く」

って、ウス、手伝いに出はったど。

そうして、行ったば、もうサルのはんばさ入るようになったば、大コンブ、ぶはら、ぶはらあ、どたら、どたらあ来たど。また、おなじこどを言うと、

「おれもお、手伝いにい、行くう」

って。

そして、クリとハチとウスとコンブとガニっこ揃って、サルのはんばさはいったどやれ。したば、サルのちきしょう、まだ、^{けえ}帰ってこねじもの。

「よしよし、みんなで役割して、かぐれでっぺ。ガニっこ、ガニっこ、おめえは水舟さ入れ、クリは、^{ゆるり}囲炉裏のほどの中さ埋まってろ。ハチは窓さくつつげ。コンブは通路さめだばるべし。おれはあ、二階さ上がって待ってる」

って、ウス、二階さ上がったもんだじもの。そうして、サルが戻ってくるのを待ってだどやれ。

暗くなるころになったば、サル、

「うう、^{さめ}寒え、^{さめ}寒え。早く火いたいであだねばなんね。うう、^{さめ}寒え、^{さめ}寒え」

って来て、木いどっさりくべて、火いたいだじもの。

そうしと、クリが

「こんどぎだ」

って、ばあーんと一発跳ねついで、サルの金玉さくつついだど。

「ひやあ、あっち、あっち、あっち。あっち、あっち。早く水舟さ入んねばなんねえ」

って、だっばーんと跳ねこんだところが、ガニっこ待ってましたというもんで、両ハサミで、サルの足、ちょん切ったじもの。

「いやあ、^{いで}痛、^{いで}痛、^{いで}痛。早くクモの巣、つけねばなんね」

って、窓さ飛び上がったところが、ハチが待っていて、ところきらわず刺したじもの。

「いやあ、なんだべかんだべ。こんな拍子悪いごどあるもんだべが、家にも小屋にもいられたもんでね」

って、外さ飛び出はったところが、コンブに足をのせて、すて一んとひっくりげえったど。

「ほんどぎだ」

って、ウスが、どかっと落ちて、サルどこ押さえつけて、殺してしまったじもの。

めでたく、ガニっこを助けてくれで、みんなで喜んで、てんでんの住まいさ戻っていったどお。

とっぴんからりん、つつぎさいろ。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

3. 感想や意見の交換 1

小田嶋 — 柴田さん、ありがとうございます。みなさん、お聞きになってどうでしたでしょうか。登場人物とか、それからカニが柿の木を育てるところとか、助け手が、助太刀がたくさん集まってくるところとか、声の語りならではのとっても面白い表現がいっぱいあったと思うんですけども。まずですね、どこか、あれ、これどういうことなんだろうとか、何か、分からないことありましたでしょうか。もし、あったら、出していただければと思います。分かりました？ 山形の言葉なんですね。柴田さんは、宮城県の出身なんですけれども、とよいさんの語りに惚れ込まれて、山形弁で語っていただきました。なにか、ここが分からなかったとか、ありませんか。

それではですね、じゃあ、何か、ここ、とっても良かったとか、印象的だとか、何か、そんな言葉でも、場面でもあったら出していただいたらいいかなと思いますが、どうでしょう。

山田 — こちらの方が絵本をお持ちなんですけど、…

小田嶋 — あ、手あげた方が…

参加者(女性) — 仙台のものです。私共知っているサルカニ合戦のお話で、コブが出てくるっていうのは初めてなんですが、非常に珍しく思いました。伺いますと、山形のっていうんで、山形ももちろん海岸線もございますが、コンブっていうのは、そんなに昔からよく使われていたものなののでしょうか。コブが出てくるっていうのは、とても珍しいと思います。

小田嶋 — ありがとうございます。コブは、ほんとにねえ、あれ、なんでって。山形からいらっしゃっている方がたくさんいらっしゃるので、分かると思うんですけど、小国っていうのは、とっても山奥ですよ。ほんとに山奥の語り手、小国からほとんど外に出たことのない方が、コンブっていうのをお話の中に語り込めたのを伝えていらっしゃるんですね。考えてみると、とっても不思議なんですけども、実は、宮城の語りにも、助太刀をするコンブっていうのは出てくるんですね。他にもやっぱり、そういう例はあるんです。で、なおかつ、助太刀をする者たちっていうのは、まだまだいろいろいっぱいあるんです。これから、もっと説明の中で出てくるとおもうので、楽しみにしててください。本当におもしろいですよね。そういう小さな事でもいいので、私の思っていたのとちよっと違うとか、そういうことが、もしあったら、出していただけますか。質問でもいいですよ。

参加者(女性) — 仙台のものです。民話のこと、存じ上げてないんですけども、今の柴田さんの語り、とってもなまって、どっちかっていうと、とよいさんのお話わかりにくいんですけども、最後のところに「殺して、ガンっことみんなで喜んで、てんでの住まいに、戻っていった」と、その前の行でしたかしら、間を開けてお話しなさったところが、とても良かったと思います。ありがとうございます。

小田嶋 — 柴田さん、何か、それについて。

柴田 — 実は、私は、とよいさんに会いたかったんです。で、会う前にとよいさん亡くなってしまったんですね。じつは、私は、ほんとに柴田郡柴田町の柴田民雄で、本当にとよいさんがどういうふうにしたのか、声の質っていうんですかね、あるいはイントネーションとか、そういう山形とか、新潟とか、それは出来ないんですよ。で私は、この本、だけでしか、とよいさんに会えないんです。だから、とよいさんにはなれないんです。でも、その、

何回も何回も、何回も何回も読んでいの中で、おれなりのとよいさん、おれのとよいさん、とよいさんのおれなのか、わかんないんですけど、そういう風になってしまったんですね。実はあの、私は、小野さんが講演を二十何年前にされた時に、はじめて、「なんだべ、民話って、なんなんだべ」って、驚いたんです。その時に小野さんが、ちょうど、とよいさんのこの本を編集なさった後で、これをすぐ求めました。だから、小国町の長者原で、どんな風に毎日、日常しゃべるのか、どんな言葉を使ってるか、一切分かりません。でも、なんかある、なにかがある、そういう思いに駆られてしまって、そっからなんです。だから、本当にそのとよいさんの語りではないんですね。ただ、私はそういう風にしかできない。で、やってきました。

小田嶋 — ありがとうございます。今の柴田さんのことばに何か、とつても考えなくちゃいけない深いことが、眠っているような気がします。どうしても、今、生きている方の語りの声しか、対面しては聞けないんですけど。それが、文字に定着されたものからできても、何かその奥にあるものを多分、柴田さんは感じ取られたんだと思います。その文字を手がかりにして、何度も何度も自分の身体で語ることで、たぶん何か、柴田さんなりのとよいさんの語りを、つかまれたんじゃないでしょうか。とつてもいいお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。

それですね、今、とよいさんにはもう会えないとおっしゃいましたが、もちろん、もう亡くなられているので、われわれももう会えないんですが、実は、佐藤とよいさんの語る姿をDVDという映像に撮りまして、それは残っております。ですから、実は、「民話 声の図書室」というのは、そういう映像とか音声で残された、その時の語りを対面して聞くその物ではもちろんないのですけれども、なんとかそれを考えるというか、感じるよすがとなるものとして、後の世代にも引き渡していくために、そのちゃんとした保存と、活用のための仕組みをつくるというのが、「民話 声の図書室」の、じつはねらいなんですね。ですから、それが軌道に乗ってきましたので、柴田さんにもとよいさんの声と姿に会うことができるようになっていっていると思います。これから、どうぞ、とよいさんに会ってください。

それからですね、今、最後のところについて、質問などでましたけれども、柴田さんが最後に語った言葉、収めた言葉、これ「とつぴんからりん、つつぎさいろ」という言葉で、これは昔話の語り収めの言葉という決まった言い方なんです。山形の言い方です。宮城では、全然違ってまして、「えんつこもんつこさけた」とか「えんつこもつこさけた」とか、「えんつこまんまさけた」とかいろんな、えんつこっていうのが付くのが多いですね。岩手にいきますと、例えば、佐々木健さんなんかは「どんとはれ」で終わりますし。まだまだ、いろんな各地域で様々な言い方があるんですね。ここでは、山形の言い方で「とつぴんからりんつつぎさいろ」。それから、語り始めのところは、「とんと昔、あつたけどやれ」で始まります。ちょっと、そこだけ補足しておきますと。

あとは、みなさん、ここがよかったとか、ここが気にかかるとか、ここ、何なんだろうという、もし、そういうことがありましたら。

参加者(女性) — 最後の、「殺してしまった」というところは、例えば、私だったら、たぶん、子どもに語るときは、なんか、使いたくないようなあなて。

小田嶋 — おっしゃっているのは、最後に、サルを殺してしまうということですよね。みなさんが、絵本なんかで読まれたのでは、サルは殺されなかった話が多いかもしれません。でもですね、語り伝えられている民話においては、殺されてしまうことが結構、多いんです。

参加者(女性) — ごめんなさい。そういうのはわかります。そうじゃなくて、多分「やっつけたんだって」とか

言って、「殺す」という言葉自体を、多分自分は使わないだろうということです。

小田嶋 — なるほど、はいはい、分かりました。私も、そういう気持ちもよくわかります。それは、そういうことがあるっていうのを、みなさんも覚えておいてください。

河井 — 今、おっしゃられた方は、「殺す」という言葉は自分では語らないっていうことですが、その辺りのことについて、どなたか。

参加者(男性) — 私、サルカニ合戦、だんだん、だんだん思い出しているんですが、明治21年生まれで、私の祖母ですけど、おばあちゃんから、サルカニ合戦聞いた時は、最後のウスが二階の、— (祖母は) 山形です—二階の天井から、石臼だと思んですけど、それが、「どでえつと落ちて、びちゃーつと潰れてしまったど」というごどを思い出んですけども、それが、非常に印象深くて、子ども心に寝物語に聞いていたと思んですけども、その細かい言葉までは分からないんですけども、べちゃつと潰れてしまったという、いじめたサルが、べちゃつとつぶれたっていう言葉の中に、潰れたって中に、この話の一番の核心があると思んですけども、そういうことで、ちょっと思い出しています。

小田嶋 — ありがとうございます。その時は、子ども心にどんな感じがしました。

参加者(男性) — 非常に鮮明にその場面が思い浮かんで、二階から本当に、憎たらしいサルめがけてウスが、どでつと落ちてきたっていう印象が非常に強く思い浮かぶんですけども、殺されたとか、そういう言葉ではありませんでした。

小田嶋 — でも、印象深い表現だったんですね。

参加者(男性) — ええ、そうですね。その場面は、非常に鮮やかに。あと、前のところはあんまり思い出せないんですけども、その場面だけははっきり思い出します。

小田嶋 — ありがとうございます。とってもいいお話、ありがとうございます。そういう、本当に感じたままでもろしいので、もし、なにかあれば。

(会場に少し沈黙があつて)

河井 — よろしいでしょうか。私はこの話が、子ども時分から、大嫌いだったんですね。実は、私、昭和十九年生まれのサル年なんです。子ども時分、親に怒られ、おばあちゃんに怒られ、するような子どもであつてですね、なんか自分の行く末を話されているように思えて、あんまり気分のいいものではなかったんです。この話を聞いた本で読んだりした時は、必ず私は、桃太郎の本を読んで、鬼ヶ島退治に行く、桃太郎のお手伝いして、自分はそんなふうにして、生きていこうと思つたくらいで。この話が、ほんとに嫌いで嫌いで。そんなことを思い出しました。そういう意味では、好きか嫌いかという観点から、あるいは、この表現が自分は思い出がある、思い出すとか、そういうとこに話持ってきたいので、どなたか。

参加者(女性) — 仙台のものです。私も実は、小学校で語る時間があるんですね。語りをしてるんですが、私はこれを「かにむかし」という絵本をそっくり覚えて、語っているんですが、かにむかしの最後は、「石臼がどしんと落ちてきて、サルはひらとう、ひしゃげてしもうたそうな」という文章なんですね。それをだいたい二年生ぐらいに秋に語ることが多いんですが、その「ひしゃげてしもうたそうな」と語った時に、子供達は、とってもいい笑顔で、「ああ」って喜んで聞いてくれるんですね。ですから、私は、伝承の語りを聞いて育ったわけではありませんので、絵本で語るんですが、逆にその文章で、子供達は気持ちやすとんと落ちるといふ風に私は思っていて、語らせていただいております。

小田嶋 — とっても貴重な体験を語っていただきましてありがとうございます。

小野 — 後でも話しますが、今のことに関して、このサルカニ合戦は大体、耳で聞くときは殺されてしまうんです。それは、非常に子どもたちに良くないというので、児童心理学の方たちから意見が出まして、「サルとカニは最後に仲よく握手をしました。めでたしめでたし」という絵本が、ずっと出ていた時期があるんです。そしてその、これではどうもおかしいんじゃないかっていうことで、今、言ってくださった方のように、木下順二さんの「かにむかし」というこの本のなかで、初めて絵本としては「サルをべしゃんとひしゃげてしまった」。でも、文章を書かれた木下さんの配慮で、殺したとは言わなかった。先ほどの方が、ウスでびちゃんとされたところが心に残ったって言われたように、語る人は幼い者の心を思って、殺したとは言わないけれども、殺したような表現を使う。最後にサルは殺されなければならないんだっていうことを、この話はやっぱり言いたいんですね。遠い昔、食べ物に独り占めするっていうことは、死に値するほどの、罪深いことであつたっていうようなことで、そういう言葉が出て来たんだと思うんですけど、今、最後の場面について、とってもいいご意見が出てよかったなと思います。一言、付け加えさせていただきます。

小田嶋 — ありがとうございます。まだ何か、本当に感じたままでもいいんですけども、ありましたら。

参加者(女性) — 河南町から来ました。血が出るところに、蜘蛛の巣つけなきやいけないっていう、なにか根拠があるんでしょうか。

小田嶋 — ここ自体としては良く分からないんですが、例えば、袂の綿くずを傷口につけるとか、そういう民間療法とか、民間の俗信のようなものは、おそらくあつたんじゃないかと思うんですね。だから、傷口に、そういうぼやぼやとした蜘蛛の巣とか、綿くずとかそうしたもので、その場をしのいで治してしまうという、そういうことなんじゃないかなと思いました。

小野 — これは本当にそうだったことをご存じないでしょうか。蜘蛛の巣で血を止めたんですね。そういうことをご存じの方、他にもいらっしやらないでしょうか。ただ、この物語の中に、こういう細かい暮らしの要素まで盛り込んでくれるのが、この佐藤とよいさんの語りで、時にはじゃまじゃないかと思うくらい、細かく細かく語ってくださるんですね。蜘蛛は大事なお薬だったんですね。

小田嶋 — ありがとうございます。あと、なにかございませんか。あはい、健さんどうぞ。

佐々木健(語り手) — いまお話を聞いてて、たいした参考になりましたが、サルカニ合戦のお話ですが、サルカニ

合戦のことを思い出したんです。この話は、別な話に展開してくんです。サルとビッキとガニが友達だったっていう話がね、サルカニ合戦の話と、作り方がそっくりだなと思ってんです。分からないだろうなと思うけども、それが、三人が友だちだったけども、ある時、餅つきについて食いたいなあって話になって、そういう展開してって、そういう話で私は覚えてるんです。

小田嶋 — あのお餅を奪い合う話ですよ。実は、それも関係のあるお話なので、後で小野先生のお話の中で、話題提供のところで出ますし、健さんがお話しされてきた話そのものも、一番最後に、みんなで見ることになりま

参加者(女性) — 多賀城から来ました。サルカニ合戦というのをね、私はサルを山の住人、カニは海辺の住人と、山辺の住人と海辺の住人との戦い、また食べ物の争いでね、そんな風に受け止めていたのですけどもどんなものでしょうか。

小野 — あの、後の私の話題提供の中でも、今のとっても大切な指摘をいただいたので、申し上げたいと思うんですけども、やっぱり山に住んで、木の実を持っていたサルと、海辺、水辺にいて、にぎりめしを持っていたカニっていうのは、非常に対照的な時代の流れをそれぞれ背負ってると思うんですね。山のサルは木になるものを拾って、その種を持って、その種を栽培した時期も、私どもの先祖にはあるわけですが、そういう形態から、次第に水辺に定住して米を作り始めて、にぎりめしを持っていたというカニがそのような姿で出てくるんだと思います。ですから、今、お感じになっていることはとっても当を得たお考えだなあっていうふうに思います。後で、また、話題提供のところで、少しそれに触れさせていただきたいと思います。

小田嶋—ありがとうございました。貴重なお話。

河井—今日、この会場に子育て真っ最中の若いお母さんが来られていて、お子さんに絵本など読んであげてるってことですので。ちょっと、今日の感想などお聞きしたいなと思います。

参加者(女性)—こんにちは、仙台に住んでいます。9ヶ月の息子です。私も子どもの頃から親に本を買ってもらったり、オモチャよりは本を買ってもらったっていう記憶があったので、まだ、自分の子どもはまだ読めないんですけど、絵本をちょこちょこ集めている最近です。仕事柄、小学生とかと会うことが多くって最近の子供達って、桃太郎とか金太郎とか知らないことが多くって、ちょっと残念だなあということがあったので、まあ、自分の子どもそうですし、近い子達にも、昔から伝わっているお話が、これから先も受け継がれていって、伝えられていけたらいいなという思いもあって今日来ました。

小田嶋 — ありがとうございます。そのほかにぜひ、言っておきたいことはありませんか。それでは、あと、もう一回話し合いの場を設けますので、その時にまた出していただければと思います。あ、もうお一方…

参加者(男性)—山形の村山からまいりました。先ほどの柴田さんの語りは、とても表情豊かでね、なんか心に響く昔話でした。私は山形におりまして、先ほどのお話を山形の南部、置賜おきたまとですね。それから、村山と最上と庄内と四つに分かれておって、方言も四つ、それぞれ独特な方言なんですよ。それで、先ほどの置賜の方言というのは、やはり柴田さんが本当に、佐藤さんですね、語りに近づいてるんじゃないかなあという、印象を持ちました。そ

してまた、山形の村山では、同じ中身は、スズメとサルというね、そして「スズメの仇討ち」という題名になっているところもあるんですけども、仇討ちはですね、やはり、ハチとウスとクリとですね、これが、最後にサルをやっつけるんですけども、スズメとサルという、それがなにか、共通する点があるなあと感じました。

小田嶋 — そうですか。そのスズメっこの仇討ちになるのが、佐々木健さんのお話の中にもあるんですね。それもまた、後の方で、DVDで見ることになりますので。やっぱり共通するものですね。ありがとうございます。

参加者(男性) — 柴田さんの語り、本当に感動いたしました。ありがとうございました。

小田嶋 — なんか、山形弁に近づいているそうです。ありがとうございました。では、1回目の感想はこのくらいにしまして、もう少し聞き語る、語り合いを深めるために、話題提供として、小野先生にお願いいたします。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

4. 話題提供 『サルカ二合戦』とその類話から学んだこと

小野 和子 (みやぎ民話の会顧問、民話 声の図書室プロジェクトチーム)

小野です。よろしくお願いします。

(スクリーンに映った佐藤とよいさんの写真を見てもらいながら)

今さっき、盛んに話題になっている佐藤とよいさんの写真です、これが。

とよいさんと私どもが出会いましたのは、二十五、六年ほど前のことなんですけれども、実は戸数十四戸の山奥のマタギの村なんです。

とよいさんはそこで生まれ育って、嫁に行って子どもを産んで、亡くなった方で、ほとんどそこから一歩も出たことがない方なんです。

仙台にも二度ぐらい来られてるんですけど、仙台に二度出て来るぐらいで戸数十四戸の山の村からほとんど外へ出ないその人の頭の中に、こんな話が住みついていたんです。しかも八十話ぐらいです。その全部は本に入れられなかったんですけど、その一部を、六十話だけですけれどもこういうふうに一冊にしました。

(『山形県飯豊山麓の民話——長者いいでさんろく原老媪ちょうじゃはらのぼばさのわかし夜話』[小野和子編 1992 評論社]を示しながら)

「誰から聞いたの？」

って聞いたら、

「お祖母ぼあちゃんから」

十二、三才の頃から、夜なべを手伝わされたそうです。眠くなるとお祖母ぼあちゃんが、

「しっかり手え動かせよ。今、祖母ぼあちゃん、むがす語っからな」

って、目覚ましのために昔ばなしを聞かせてもらった。

そのとよいさんの話は一体どこから来たのかと、いつも思うんです。

でも、とよいさんがしっかりと、こんな話を頭に入れておられて、先ほど、どなたかが言ってくださったように、クモの巣を血止めの薬に使うなんてことまで語りこめて、一話一話、実に味わい深く、唱えごとも入っているわけですね。

私、こういう話が、学校も小学校しか出ておられない、字もあんまりよく書けない方の頭に、こうやって棲みついていることの不思議をいつも思うんです。

どうしてだか、わけは分かりません。けれども、その方の頭に、なんでだか、遠い遠い先祖の昔から流れてきた物語が棲んで、そして、たまたま、私どもがその方に出会ったわけです。

私たちが出会ってその方から聞かなければ、その話とはよいさんと一緒にあの世へ行って、今頃無いんです。

そういう人がいっぱいいらっしゃる気がしてならないので、私たちみやぎ民話の会は何かすごく焦ってるような気持ちで、あっち行きこっち行きして、語ってくださる方を求めて、話を記録したりテープに取ったりしているところなんです。

これは (2枚目の写真映写)、とよいお婆ちゃん。

いい顔でしょう？もう一つ、これはね、とよいさんの部屋の窓から、こうやって見ているのね。周りは何にも無いんです。それで、いつも感心しちゃうのは、これはね、椿の花を牛乳瓶に挿して自分の脇に置いて、そして、お尻の所は写ってないんですけども、段ボールにボロを詰めて椅子にしているんです。

こういうこと、そのとき言われたんです。

「おれ、膝さ手え置くようになってから、こうして、段ボールの椅子にかけて外を見てるのが、緑見てるのが、何

よりの楽しみだ」

「膝さ手え置くようになってから」って、胸にきませんか？

それまでは手はいつも動いていたわけです。立ってても座ってても動いていたそうです。でも年を取って、もうそんなに働かなくてもよくなって手を置くようになったら、こうやって段ボールを詰めた椅子に腰かけて、椿の花を牛乳瓶に一本挿して、そして、外を見てるんですよ。

でね、通りかかった人が、

「ばあちゃん、そこで何見った？」

って聞くと、とよいさんは、

「おらあ、ここで世間ば見下ろしてた」

って答えるんだそうです。

だから、とよいさんの世間は峻厳な山々と田圃なんですね。

そういうふうに思いますと、今、柴田さんが、柴田さんとして心をこめて語ってくださったあの話は、遠い遠いはるかな昔から、たまたまこうして皆さまの前まで来て、それをご披露することができたわけです。

私どもがとよいさんに出会わないで、この話がとよいさんと一緒に天国に行っちゃってたら、この話は皆さんにお届けできませんでした。そう思いますと、一つ一つの話が大事で大事でなくなるんですね。

じゃあ、どうして、とよいさんに巡り合ったのか、ということになりますけれども、私たちの会の仲間に登山をなさる方がいたんですね。

^{いいでさん}飯豊山の傍なんです、とよいさんの家は。後ろに見えているのが飯豊山の麓ですけどもね、こういう所なんで登山宿などは無いわけです。

昭和になって、大学生たちが山へ登るようになって飯豊山の登山に来ると、泊る宿が無いもんだから、とよいさんの所に、泊めてもらえないかとか、庭にテント張って泊めてくれないかとかって来るんで、泊めてやったそうです。

その中に、私どもの会の仲間である早坂さんというんですけど、早坂さんも飯豊山に登るときにそこに泊る。で、

〈あのおばあちゃん、昔ばなし知ってるかもしれない〉

って、早坂さんはふっとその気になられたわけですね。

そして、私を誘ってくださって、二人で初めてとよいさんの所に行ったんです。そのきっかけがなければ、袖すりあう縁もなかったといえますかね。

それでね、とよいさんのいろんな言葉が忘れられないんですけども、山登りする人たちの登山宿をしてて、

「あんたたちは、えらい立派な靴履いて、いい洋服着て帽子まで被って山さ何しに行くんだ」

って聞いたんだって、大学の山岳部の人にね。そしたら、

「ただ登るんだって言ったんで、おら、腰抜けるくれえびっくりしたぞ」

って。自分たちが山へ行くときには、熊を撃ったり、兎一羽ワナにしかけたり、山菜採ったり、木伐ったり、山の恵みをもたらしてくれることがあっても、

「あんな立派な洋服着て靴履いて、ただ、山登って下りてくるんだから、おら、ぶったまげて腰抜けた」

って、こういう違いがあるわけですね。

山がそこにあるから登って言った人がいたそうですが、その感覚ではなくて、山というものはいつでも自分に恵みを与えてくれる、無くてはならないものとしてそこにあるので、山というものに対する思いの違いがあるんですね。

そして、民話というのはどちらかと言うと、そのような所から、山がそこにあるから登るという境地ではなくて、山からさまざまな恵みをもって人間はようやく生きていけるのだという、そういう地点で民話は無数に生まれてきているような気がいたしております。これがとよいさんについての説明です。

そしてね、皆さんにお渡しした資料を見て下さい。すごい立派な資料でしょう？

今日、来られた方は、とても得をしたと思いますよ。私たちが苦勞して、あっち行き、こっち行きして歩いて聞いてきたさまざまな民話をこうして一挙に皆さんにお渡ししてるんですからね。

ここには、今のとよいさんのも含めて五つですね。サルカニ合戦の話をごここに置きました。とよいさんの以外は全部、宮城県のもので。

でも、サルカニ合戦という名前を持っているのは一つだけなんです。

後はみな、とよいさんの「がにっこの敵討ち」でしたけれども、違う名前なんです。「雉と猿」「蟹のかたき討ち」とか、「猿っこむかし」とか言って、「サルカニ合戦」という、私たちが慣れ親しんだ名前というのは、聞くときには、本当に珍しいんですね。いろんな変形で出てくるんです。

先ほど、^{さききつよし}佐々木 健 さんが、佐々木健さんは遠野のご出身ですけれど、

「遠野で聞いたサルカニ合戦は、こういうふうじゃなかった」

とおっしゃいましたけれども、遠野だけではなくて、宮城県でも非常に違う形でサルカニ合戦というのが出てきます。実際に聞いて歩きますと、絵本にあるような話を聞くことは割に稀なんです。全く無いわけではありません。それを山奥のとよいさんは、まるで絵本にあるのと骨格の全く同じものを記憶しておられたことが、一つの不思議に思われます。

江戸時代に「赤本」というのが出てきて、これは皆さん、ご存じと思うんですけれども、それまでは、字も読めなくて本も持つことができなかつた子どもや女たち、^{おんなこ}女子どもという言い方をするのは、ちょっといけません、赤本というのは、そういう文字から遠かった人のために作られた本だったことはご存じだと思います。

サルカニ合戦という言葉が出てきたと言われているのが、この「赤本」なんです。これは江戸時代になって初めて生まれてくるわけですけれども、このときに取り上げられたテーマが、人々が語ってきた昔ばなしから取ってあるのが多いんです。

「カチカチ山」もそうですし、「舌切雀」も、「花咲翁さん」も赤本の中に入ってまいりますけれども、^{のち}後に、明治時代になって教科書の読本に民話が入るようになりますが、そして、その読本の中に入った民話を「五大昔ばなし」と言って、五つの大きい昔ばなしと呼んで、日本の代表選手みたいにその話を言うんですけれども、実は、代表でも何でもありません。

あの赤本の時代に取り上げられて、明治に入ってから、それがそのまま教科書の読本に、さらに無難なものに枝葉を切ったり、例えば、富国強兵というような思想も盛り込まれたりして定着してまいります。

江戸時代の赤本の一部をコピーしてまいりました。(映写投影して説明)

これが蟹なんです。これが蜂なんです。最後は、猿がやっつけられる場面です。

そして、これがうるめと書いてるけれど昆布なんです。それから、白と杵がありまして、ここに卵もいますね。それから包丁もいます。そして、赤本にはこの他に蛇も出てくるんです。だから、助太刀する者たちがいろんな姿で何種類も出てきてしまうんです。

ただ一つ赤本に無いのは、牛のべた糞ですね。先ほど、これを子どもに聞かせているとおっしゃった方がいらっしやっただけでも、木下順二の絵本には牛のべた糞というものがとても大事な役割をして出てくるんですけれども、

赤本には牛のべた糞は出てまいりません。

それから、とよいさんの話にも牛のべた糞は出てこないで昆布が出てくるんですね。

「それはなぜか？」

って言われると、ちょっと私も答えを言いにくいですけども、木下順二のこの本は、

「猿を最後に臼でひしゃげてしまうということで描いたことで画期的だった」

と、さっき程申しましたが、もう一つ画期的だったのは、教科書では絶対登場させなかった牛のべた糞を、ここへ助太刀の仲間に出してきていることでも画期的なんですね。とっても汚いものだし、そんなものを子どもの読み物に持ち込んではいけないという考えもあったんでしょう。

でも、ご存知かと思うんですけども、牛のべた糞は大事な肥料になるばかりではなくって火だったんですね。焚き物だったんですね。乾燥させて、それを燃料に使う、非常に大事な役目を持っていたものだったわけです。

助太刀する者一人一人に先祖の人たちはさまざまな役目を与えているんですけども、牛のべた糞も、その中には大事な役目をもらってきております。

牛のべた糞が入っていない話も結構あるんです。とよいさんの話にも牛のべた糞が入っていません。そういうときは、なぜか代わりに昆布が入ってるんですね。ズルズルってすべるからなのかも知れません。

私は、とよいさんの話にべた糞が無くて昆布が出てきたということに、山奥の人の世界に、海のものを語りこめている世界の広がりのようなものを感じます。

身近な牛のべた糞としないで、遠い海で獲れるブハブハ、ブハブハとやってくる不思議な得体の知れない昆布というものを登場させてきているところに、一つの世界の広がりや詩心のようなものさを感じております。

そういう意味で、助太刀する者は何でなくてはならない、いや、ある限定はあるんですよ。だけでも、多様な姿で登場しているのではないかと思うんです。

ちょっと話が前後しますが、助太刀する者のことに、今、話を持っていきますと、私たちがよく知っているサルカニ合戦の助太刀者は、臼、栗、蜂ですね。

その他に、この資料で、皆さん、後で読んでいただくとありがたいと思うんですが、牛のべた糞とか、昆布とか、それから、針とか、豊針なんていうのも出てくるんですよ。それから、何でしたっけ、まだ、いろんな助太刀の者たちが出てくるんですけども、助太刀の者たちは、みんなそれぞれに性質を持っているんですね。単にそれを並べたのではなくて、例えば、栗っていうような物、柄の実のこともあるけれども、木の実っていうのは、古代の人々にとっては大切な食糧でした。

青森の三内丸山遺跡では、グルーッと栗が植えられていたと言いますが、栗はなくてはならない食べ物だったんじゃないかと思いますが、その栗、木の実の栗。

それから、武器を持った小さな動物の蜂ですね、刺すものですね。この蜂が変形して針になったり包丁になったりしますけれども、この針っていうものには、私どもの先祖が特別な思いをこめていると思います。

例えば、民話をやられる方はお気づきだと思いますが、得体の知れない男が毎晩、娘の所へ忍んでくると、正体を見破るためにその男の着物の裾に針を刺すって、これは『古事記』の三輪山伝説にもあることなんですけれども、そのときに針でもって正体を見破っていく。

針っていうのは、ご存じのように人間が発明した最初の文明ですね。青銅の時代から鉄を作る技術を人間が手に入れるようになった文化の象徴みたいに針が民話の中によく出てきて大切な役目をしてくれるんです。

鉄くろがねという形で出てくるんですけども、その針につながる武器を持った蜂とか、それから、臼はですね、単に大きくて重いだけではなくて、やはり、人間が最初に作った道具だと言われてますね。木を切ってきて中をくり抜けば臼ができるわけですから、人間が一番はじめに作ることができた道具としての力を持った臼。そして、穀物

栽培がはじまることとも関係がある曰。

それから、先ほど言った牛のべた糞というふうに、助太刀に来てくれる者たち一つ一つは、人間の文化の足跡をどこかで教えてくれるような形で配置されていることも忘れないでおきたいと思います。

それから、赤本あたりからサルカニ合戦と言われるようになったと言いましたが、さっき、ちらっとお見せしましたけれども、これは当時の浮世絵師が書いた絵だと言われています。^{註1}西村重長という鳥居派の浮世絵師が書いて、この人はすごい芝居が好きだったそうです。ですから芝居の絵みたいに思えますね。全部、擬人化しちゃって。人間が出てきて振りをつけている辺り、赤本の影響は口伝えの文芸にも、やはり大きな影響を及ぼしていたような気がいたします。

^{註1}西村重長…江戸中期=享保・宝暦=18世紀前半にかけて美人画、役者絵などの一般絵のほか、「絵本江戸土産」などの絵本の分野でも活躍した。

とよいさんの語りも、お祖母さんから受けつがれてくる、ずうーとその先には、もしかすると、何かの拍子で赤本からストーンと落ちてきた話がしずくのように垂れて、それが広がっていったということも考えられ得るかもしれせん。

この前の第一回ゆうわ座のときには、「かちかち山」についてお話をいたしました。

来てくださった方は分かると思うんですが、「かちかち山」という、やはり皆さんによく知られたこのお話は、二つないし三つの話がくっついて、こうなりましたよってという説明をさせていただいたと思うんですがけれども、サルカニ合戦に関しては、もともと二つの話だったものが、真ん中で離れて、一つずつの話になったのではないかって、これは私が言っていることでなくて、柳田國男がおっしゃっていることなんですけれどもね。もともと、サルカニ合戦の話は、もう一つその前にくっついていた話があって、その後、そこでやられてしまった小さな水辺の動物が仕返しをする話がくっついたのではないかと、こういうふうに、^{註2}柳田國男が書いておられます。

^{註2}「昔話覚書」『定本柳田國男集』第六巻 1963 筑摩書房

私はそのことについて、その話が正しいかどうか、ちょっと分からないんですけども、私どもが聞いて歩いている話に残っているんですね。

柳田國男が主張されていることを裏付けるような話が、千葉直次さんという鶯沢の語り手ですけれども、この方の語られている話には二つの話がくっついたまま一つになっている姿が表現されております。

そんなこと何にも知らずに、私たちは直次さんに話を聞きに行って、直次さんの話を聞いてきたんですけどけれども、あらためて見直しますと、直次さんの話は、柳田國男がおっしゃっている通りの形を持っているんですね。どんな形かという、ちょっと初めの方を読ませていただきますね。(配布資料10 ページ)

かに
「蟹のかたき討ち」千葉 直次さんの語り (宮城県栗原市鶯沢 明治四十二年生)

って書いている資料お持ちでしょうか？もし無い方は、あそこにありますので、ぜひ手に取っていただきたいと思います。

直次さんという方は、本当に軽妙な素晴らしい語り手でありました。本当に忘れられない、心に残る語り手でいらっしました。

その軽妙な語り口というのは、こんなふう展開されるんですね。ちょっと、直次さんの口真似でいいますとね、

壇山だんやまにすんでた猿っこがね、里のほうさ出てきた。ほっかぶりをして、抜き袖ぬいそでにして、ひょうひょうと口笛をふいて、なにかいいことがねえかなって出てきたわけです。

お庄屋しょうやのところまで来ると、その前に清水のわく池があった。夏のはじまりでずいぶんあついから、蟹が洗い場のところさ出てきて、夕すずみをしていた。

「おう、おう、おう、猿こ衆しゅうかや」

「おう、蟹こ衆しゅうかや。なにしてたっけ」

「あんまりあついから、すずんでたところや」

「おう、そうか。ところで、なにかいいことねえかや」

「あるある。あのな、お庄屋でな、今日、嫁とりでご祝儀だとや。そんで餅搗くんだと」

「はあ、そいつ食いてなや」

と、こうなったのさ。

ここまでで切らせていただきますけれど、こんなふうな、ちょっと共通語のような語り口なんです。

でも、お猿さんが袖をこうやって山から下りてくるあたりは、なんか芝居の一場面を見るようなひょうきんさがある、そして、

「なにかいいことねえかや」

って、ここで、猿こ衆とか、蟹こ衆とか、衆ってという言葉が書いてありまして、その猿の一族、蟹の一族のような所属する集団を暗示するような形も偲ばせてくれる、こういう言葉がふっと、出て来ているわけなんです。

猿と言わないで、猿こ衆、これは猿に対するていねいな言い方であると同時に、それぞれがなんらかの集落に属している属性をも語っているような気がいたします。ときどき、こういうふうに出てくるのね。

そして、

「庄屋さんで、今、餅搗いてるから」

って言うんで、それで猿が、

「お前、ドボンて石を落として、エーン、エーンって、赤ちゃんの泣き声しろ。

みんなが井戸さ落ちたと騒いで、そっち行くから、その隙におれは餅を盗んでくるから」

って、こう言うわけですね。

そして、実際にそうして、猿は庄屋さんの家の餅を奪って山へ逃げていくわけです。うまくいけば、自分一人でこれを食べてしまおうと思ったわけですがけれども、途中でそれを落としちゃうんですね、持ってて運んでるつもりがね。

そしたら、後から、ワサワサ、ワサワサ行った蟹が、落ちてた餅を見つけて一人で食ってるわけです。

「泥だらけにして、猿、おれに、こんな泥のついた餅食わせるのか」

って言っていると、猿が来るんですね。

白ごと運んでいったつもりが、早く行ってみたら白の中がからっぽだったから慌てて戻ってきたら蟹が餅を食ってたんで、猿は怒って、

「おれにも食わせろ」

って言った。そうすると、蟹は熱いところをバーンと投げた。

猿はそのために顔に火傷して、それから猿の顔が赤くなった、とかっていう話が一つあるわけです。

怒った猿は蟹を殺してしまった。殺された蟹かたきの子どもは、猿を仇かたきと思って仕返しに行くという、そういう話が前に一つ来るんです。

千葉直次さんの話はこのように話が進んでいくんですが、この形が、実はサルカニ合戦の非常に古い原初的な形と言っていいと思います。

そして、この話に私どもが巡り合ったことを大変幸せに思うわけですが、こういう話だけでなく、やっぱり猿と蟹の話で、猿が餅を一人で食べようとするんだけどその餅を猿は落としていく。蟹がそれを拾って穴の中に餅を持ってきて、一人で食べてるのね、そこへ猿が来て、

「おれにも食べせろ」

って言うんです。そうすると、蟹が熱いところを投げたりするんですね。猿が怒って、蟹の穴の中にお尻を突っ込んだんだそうです。

「そうしたら、蟹がそのお尻をガチッとハサミで切ったから、猿のお尻は赤いんだぞ」

とかですね、

「蟹はそのときに、猿のお尻をハサミで切ったために毛が生えて、毛ガニの始まりはこれなんだぞ」

って、変な謂れ話が着いて一話を成していくわけなんです。仇討ちはそこでは出てこないという話がたくさんございます。

後で、伝承の語り手の方が語ってくださったサルカニ合戦の話をDVDで映してまいりますけれども、そのときに、この「餅争い」っていう、お餅を争っている話だけで成り立っている話を、ここにおられる佐々木健さんの語りも含めて皆さんに聞いていただこうと思います。これはサルカニ話の原型として非常に大切な話なんですね。

人々が、二つの話をそれぞれ独立させながら、しかも今日まで、みんなにサルカニ合戦ってこんなに愛されて広まっていった。このサルカニ話の命はどういうところにあるのだろうかということが一つございます。

どんなに面白おかしく語られても、命長らえる話と、途中で消えていってしまう話とあるんですね。そして、いつまでも残っている話には、残っているだけの理由がございます。

それでね、私は思うんです。今、「餅争い」という言葉を出しましたが、後でまた、この資料を読みなおしていただきたいのですが、餅が割によく出てくるんです。

そして、餅というものは、人間が作り始めたお米を加工して、そして、神さまにお供えするためのもの凄く大事な食べ物なんですね。

その話が先にあるって、その後、サルカニ話が出てきたのではないかっていうふうに言われますと、私なんか、ちょっと困ってしまうのね、餅の方が後じゃないでしょうかと思うんですね。

といいますのは、サルカニ話の構図をよく見ていただくと、先ほど、言ってくださった方の発言と、とても関係があるんですけれども、私どもの先祖たちが辿ってきた足跡を、非常によくこの話は留めているような気がいたします。

ご存じのように、人間は一番初め山で暮らしてましたね。

さっきのとよいさんのように、山の恵みを得て、山を中心に狩りをしたり、山の木の実を採ったり、それから山菜を採ったり、川を上ってくる鮭を捕まえたりして、山を中心に狩猟生活とでも言いますか、木の実を拾うような暮らしを一番初めにしました。

そういう暮らしは、あちこち移動して歩かなければならないわけですが、米や稲作が始まってきますと、人々は移動ではなくて定住して、それこそ、衆（集）を作っていくわけですね。集落を作っていくわけです。

一番はじめに、山を象徴する、山の住人を象徴する猿がトコトコ下りてきて柿の種を持ってんですね。

そして、ヨッコラ、ヨッコラやって来た蟹は、手に、ご存じのように米の握り飯を持っている。

これは、わけもなくそうされたのではなくて、やはり山で木の実を食べていた猿と、それから、水辺に定着して

米を作りはじめている蟹という対象の中で、物語が展開してまいります。

そして、次にこれを交換するんですね。

皆さんもご存じのように、私どもの先祖は、それぞれの土地で取れる物を持ち寄って、まず、交換経済をしましたね。お金が出る前の話ですけど、交換をして、

「あっ、こっちはこういう物がある。こっちはこういう物がある」

ってという了解をする時代がございました。

お金でそういう物を買ったりするのは、それからずうっと後ですけども、交換の仕組みもこの物語の中には入っています。

そうして、猿に象徴される山での暮らしは、やはり先に展開していた世界の強さを持っているわけですね。

後から新しく拓けていこうとする世界は、いつでもたたかっていかななくてはならない弱さを持っているわけですね。

ですから、その弱さを象徴するように、水辺の生き物、蟹とか、ときにはフルダビッキ（ヒキガエル）のこともありますね。でも、みんな水辺に生息する力の弱い、猿に比べると走ることも登ることも出来ない小さな者たちが、水辺によって米を作りはじめるわけなんですよ。

ですから、ずうっと農耕が始まってくるまでの経過を、サルカニ合戦の流れは私たちに訴えてくれていると言ってもいいんです。

山の猿と水辺の蟹、柿の種を持っていた猿と握り飯を持っていた蟹という象徴的な形で、私どもの暮らしの流れ、歴史みたいなものも映しだしてくれていると思います。

それから、この資料集の中でとよいさんの語りと永浦誠喜さんという宮城県登米郡南方町の方の語りには、柿の種を植えて、

「おがれ おがれ」

って言うセリフがあるでしょう。

南方の永浦誠喜さんののは、

早く芽を出せ

出さねえごったら

ちよん切るぞ

で、今度、芽を出すと。

早く大きくなれ

大きくなねえごったら

ちよん切るぞ

で、今度は、水かけると、

早く実が生れ

ならねえごったら

ちよん切るぞ

って、ちゃんと言っていますね。

それから、とよい婆ちゃんの方は、

はやぐ ^お生えれ、 はやぐ ^お生えれ

^お生えねえづど ^おぼっけえすぞー

^お生えれ ^お生えれ ^お生えれ

って、やっぱり唱えごとをして、柿の種に早く芽を出させようとしていますね。

はやぐ おがれ、 はやぐ おがれ
おがれねづど はさみ切るどー
おがれ おがれ おがれ

とか、

はやぐ なあれ、 はやぐなあれ
ならねえづど はさみ切るどー
なあれ なれ、 なあれ なら

って。

それで、皆さんは成り木貴めっていう習慣をお聞きなつたことはないですか。どこか皆さんの故郷で、お正月の
すごく大事な行事として、実のなる木をこう、ちょっと叩いて、

「成るか 成らんか 成るか 成らんか」

って、木を責めるんですね。すると、木の陰に隠れてる人が、

「成りもうす 成りもうす」

って木の代わりに返事する行事が、皆さんの故郷にはないでしょうか。

これは、まだ残っている地域もたくさんありますし、宮城県だけではなくて東北のあちこちで成り木攻めという
営みは今も残っています。

これは太古の人たちが、実のなる栗とか柿とか梨とかそういう物を大切に育てていく様子、栽培していく様子を
ここに映し出しているんじゃないかと思うんですね。それがこういう文句になって出てきております。

それから、この唄のような文句で言えば、とよいさんはですね、

がにっコ、がにっコ、どさ行くばあー

猿のばんばさ 親の敵^{かたき} 取りたくて行くあんだー

って言うんですね。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこへ行かれますか」

とか、

「お腰につけた物は何ですか」

みたいな科白が、敵討ちに行くときに入っているんですね。

これ読んでたら、とよいさんの口調が思い出されたんですが、

がにっコ、がにっコ、どさ行くばあー

猿のばんばさ 親の敵^{かたき} 取りたくて行くあんだー

って、こういうような調子なんですね。で、

がにっコ、がにっコ、どさ行くばあー

猿のばんばさ 親の敵^{かたき} 取りたくて行くあんだー

って、くり返しながら行くあたりも、何て言ったらいいでしょう、唱えごとの美しさが、話を味わいのあるものに
して出してくれているような気がいたします。

こんなふうな、世の中が大きく転換していく足跡を留めようとするように、餅を得て一定の農耕作業が安住の地
を得たときに、振り返るようにしてサルカニの話が生れてきたのではないかなあというふうな、例えば、私なんか
は考えているわけです。

ですから、ふり返って先祖の足跡をこの話に仕立てて、私たちに残してくれた先人の心を受け継ぐような思いで
サルカニ合戦を聞くわけです。

そして、サルカニ合戦はそれだけではないんですね。

もう一つ読ませていただくと、こういうサルカニ合戦もあるんですよ。

お持ちいただいている資料の中の、今野ふみさんという人の「猿っこむかし」を開いていただけますか。これは、すごく好きな話の一つなんですけどね。短いので、ちょっと語り読みさせていただきますね。

「猿っこむかし」今野ふみさんの語り（宮城県加美郡宮崎町 明治四十一年生）

むがすあつたづおんな。

すずめ 雀 っこのどこさ、猿が卵もらいに来て、

「雀どの、雀どの。卵けろ」

と言ったんだと。

「けらんねえ」

「けねごつたら、この家ぶっ壊すぞ」

と猿が言うんだと。雀っこ、

チュンチュン

とないて、卵 けたれば、猿は、

一の坂で ころころ

二の坂でも ころころ

三の坂で べっちやり

とぶっちやいでしまったと。そして、

「また、けろ。また、けろ」

と言うんだと。

雀っこ、また、チュン、チュンとないて、二つ目の卵、けたれば、

一の坂で ころころ

二の坂でも ころころ

三の坂で べっちやり

と、まだもぶっちやいでしまったと。そして、

「また、けろ。また、けろ」

と言って、三つ目もぶっちやいて、とうとう雀っこの生した卵みなもって行ってぶっちやいてしまったと。

雀っこ、チュン、チュン、チュンってないでだれば、栗っこやっきてね、

「雀どの、雀どの、なしてないでだ」

ってきいたと。

「せっかく卵生したのに、猿っこにみながらとられてしまった」

って雀っこ言ったれば、栗っこ、

「よしきた。敵 とってやる」

って言ったんだと。

つぎに、畳針やってきて、

「雀どの、雀どの、なしてないでだ」

「せっかく生した卵、猿っこにみながらとられてしまった」

「よしきた。敵とってやる」

ってね。その後、蟹だの、臼だの、びた糞だのもやってきて、

「よしきた。敵とってやる」

って言うので、みんなで猿っこの家さ行って待ってたんだと。

しばらくずっと、猿っこのが、

「おお、寒い、寒い」

って、杉葉っことすぎばが(かついで)帰ってきたんだと。

栗は、すでに炉の中さくぐっていたもんだから、火たいた時、猿の金玉きんたまめがけてドンとはねた。

「あつつい、あつつい、あつつい」

って、水瓶さ行って、金玉冷やすべって思ったれば、水瓶の中にいた蟹っこのに手はさまれたと。

「いた、た、た、た。こんな時、寝た方がいい」

って寝たれば、今度は、寝床に畳針がいて、

チクチクチクチクってさした。

「いたい、いたい」

って、外さとび出したれば、びた糞びたくそで(つんのめって)、すてんところんだ。そこへ、桁けたの上うへにいた臼が落ちてきて、猿っこは退治されたんだと。

こんで、どびんこさげて、おちゃっこのまんね。

って、こんな話なんですけどね。面白いでしょう。

ここでは、猿と雀なんです。先ほど、佐々木健さんが雀だって言われたけれど、雀も出てくる話があるんですよ。

雀だけではなくて雉だったり、後でまたお聞かせしますが、空のものとのたたかひの姿で描かれているサルカニ合戦もあるんですよ。

雀だの雉だの、そういう空を飛ぶものと地上にいる猿だの兎だのが争って負けるんです、最初、空のものはね。

そうすると、助太刀のものたちが現れて、やっつけに行くって、ここもね、とっても面白く思うのは、先ほど、水辺の蟹と山に住む猿という言い方をしたんですけれども、猿に象徴される地上に住むものと、雀とか雉などの空を飛ぶものとの葛藤も、私たちの先祖は描いているんですよ。

やっぱり先祖たちは不思議だったと思うんですね。地上を離れて空を飛びながら、地上のものの理解できない世界を作る空飛ぶものたちの存在というのは、何も知らなかった古い人々の間では一つの神秘ですらあったんじゃないでしょうか。

その空飛ぶものたちと地上のものを対置させて、一度は空飛ぶものは負けるんです。それも、卵をつぶされるといのは子孫を絶滅させられるような形で出てくるところも面白いと思うんですけれども、その空飛ぶものたちを地上のものが加勢しながら、守っていくとか、別な言い方をすれば自分の支配下に空飛ぶものも治めていったという、そういう流れがあるのではないかと思います。

私が、今言いましたようなことを、ちょっと頭におかれて、そして、全部の資料を紹介はできませんでしたが、この資料にある話は、みんな実に大切な面白い、いい話ばかりですので、家へ帰ったら、

〈一口でサルカニ合戦と言っても、猿と蟹だけじゃなくって、いろんな類話があったり、いろんな時代の背景があったりするんだなあ〉

って思っていたきたいと思います。

今、私が読んだ今野ふみさんの語りには、畳針なんて出てくるのね。そうすると、時代は、畳がもう出てきてて畳を作る針まで出るんだから、これはすごく新しいものをここへ引っばってきているんですよね。

これを突然引っばってきたのか、このような形で生れていたのかということまでは分からないんですけども、こんなふうにサルカニ合戦と一口にいう話は、いろんなものが内在されたまま、半分くらいは混沌として私たちの前に置かれていると言っているかと思います。

その変わった混沌たるサルカニの話を、今日は終りの方で、DVDでぜひ皆さんに聞いていただきたいと思うんですが、それは一つも、教科書にあるサルカニの話ではないんです。

そういうものが語られていた、そういうものがいっぱい生れた中で、今、私たちの中に定着しているサルカニの話が形成されたんだということ、そして、それを作ってきた先祖たちの思いや、それを伝えてきた心っていうものをもう一度偲びたいと思います。

最後にですね、先ほど、猿を最後に死なすという大事な問題が出てきましたが、死なす、殺すという言葉でなくて、臼がびちゃんと潰したとか、先ほどの木下順二さんの、「臼の下でひしゃげてしまった」って死を暗示する言い方で猿を退治しますが、私どもの先祖たちは、食べ物の分配について、いつも実に厳しいんです。

食べ物を一人で取ってしまう、不正に取ってしまうことへの怒りが、いつも民話には入っていて、そういうことをした者には容赦のない報復が加えられるんですね。

そこを甘くして、最後に握手させていいのかどうかということは、語る人の問題にもなってくると思いますが、やはり語り伝えられてきた形の中に、解答を見つけていきたいなというふうに思います。

何か質問がありましたら、取りとめないような話でしたんですが、後で質問を受けさせていただくことにして、ひとまず、ここで終わらせていただきます。

記録 河井 隆博(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

5. 伝承の語りによる記録映像の上映 — 『サルカニ合戦』とその類話 —

小田嶋 — いろいろな問題提起がなされましたので、ここはわからなかったのもう少し詳しくとかあればいかがでしょう。それではですね。まずはDVDを観ていただいて、それからまた出していただければと思いますので。今から観ていただくのはですね、宮城の貴重な語り手のお二方の語りです。佐々木健さんと伊藤正子さんです。佐々木健さんは、今ここに来ておられます。今から四つお見せしますけども、どれも「サルカニ合戦」と関係のあるグループになっているお話です。で、最初はですね、佐々木健さんのお話で、「スズメっことサル」というお話です。先程今野ふみさんのお話にあった卵を取られてしまうお話なんですけども、二点わかりにくい言葉が出てきていますので、最初にちょっと説明しますと、スズメの卵を食べてしまったりとってしまったりするのが「山兄^{やまあに}」というんだかわからないものなんですけども、これはサルのことをいうこともあるし、それから人間でもはぐれものというんですか、普通の人間とは違うような不真面目ではぐれもののような遊び人のような人を「山兄」というんだそうです。それからもうひとつ、「ごんぞ」というのは、これは御存知の方もいるかもしれませんが、これは木屑ですとか、オガ屑とか藁屑とかちゃんと使えなくて屑になって残っているようなそうしたものを「ごんぞ」と呼んでいます。そのことをちょっと頭に入れてもらうとよくわかると思います。では一番最初に、佐々木健さんの「スズメっことサル」というお話です。

「スズメっことサル」佐々木健さんの語り（岩手県遠野市宮森町出身 宮城県宮城郡利府町在住 昭和十二年生）

むがすあつたづおなす。

あるところにスズメっこいす、そして、五つだか六つの卵っこ^{たまご}生したっけどすや。

したら、そのスズメっこなす、この卵っこ大事に育てなげないなと思っただけども、あまり面白いもんだがらなす
「チュンチュン、卵っこ生したじゃ」

って騒いで歩いてだっけどしや。

そごさ、なしてだか知らないけども、山兄出はってきたっけどすや。（小野—山母ね）山母でなくて、サルっこ。

（小野—ああ、サルね）サルっこ出はってきてなす、

「いやいや、スズメっこ、お前、卵っこ生したづでないが」

「いい卵生したがら大事に育てるんだ」

と言っただす。そしたら、山兄なす、

「おれさ、卵っこひとつ、けねがや」

と言っただす。

「この卵、だいじに育てなげなんないがら」

で言ったら、

「お前そんなごど言たってわねんだど。けねごったら食ってしまうど」

と言っただすや。食われてはわねど思っって、

「んじゃ、仕方ねえがら」

って言っって、ひとつやっただすや。したら、

「ああ、もらった、もらった」

って喜んで帰っていったっけすもなす。帰っていったがらいいなど思っただら、途中で引き返してきて、

「卵っこうめがったがら、もひとつけろや」

って言っただ。

「もうひとつけろやって言ったって、けるごどできね、けるごどできね」

って言っても、

「けねごったら食ってしまうど」

って言われたがら、おっかなくなってしまうどすや。そして、ほれ同じこと二、三回繰り返したがら、残りひとつになったんだどす。今度これちよされたら、なぞになるかわがんね、大事に育てなげなんねど思って、巢の中でなす、おっばいのどごさ隠してみだり、羽っこで隠してみだり。体っこのあっちこっち動かして隠すべっと思ってうんと苦労してだんだと。

したら、なんのはずみでが、卵っこひとつ、巢からぼーんと落ちて、ひとりでもでなす、ごんぞ屑の中さ隠れて見えなくなつたづもなす。

〈見えなくなつたがらなじよしとらいがべな〉

って思ってたら、山兄出はってきて、

「やあや、うめがったな。さっきひとつ残っていだがら、もうひとつおれさけろや」

「お前さけるものなんかねえ。卵っこ、どごさもねえじえ」

って言ったどすや。

したら、巢ばなす、ほっくり^{けえ}返したどすや。んでも出はってこながったどすや。

したら、山兄ごっしゃいでしまつて、

「われひとりで食ってしまったのがあ」

って難癖つけでなす、叩きつけて殺されてしまったどすや。

したら、二十日ばかりたつたころになす、ごんぞ屑のながの卵っこ、ひとりでもえででなす。そして、騒いでだらつたどすや。

したら、そごさ栗っこが、ころころ一って転がってきてなす、スズメっこさ、

「お前、なにしてそんなごどやってらつたんだ」

って言ったどす。

「こうこうこういうわけで山兄に親取られたがら、こうやって嘆いでだどこだ。なんとしても^{かだぎ}仇っこ討だなげねだめだど思ってだどごだ」

って言つたらなす、転がってきた栗っこが、

「おれ、手助けすっから」

「お前さ助けてもらつたらたいしたもんだ」

って、ふたりで歩いてらつたどすや。

そごさスガリっこ飛んできてなす、

「お前だちふたり仲よぐどこさ行くどごだ」

「こういうわけだがら、山兄のどごやっつけさ行くどごだ」

って言つたつたけどす。

「んで、おれも手助けすっからよ」

ってことになつて、スガリっこもなす、手伝うごどになつたどす。

まだしばらく行つたらなす、べだべだって音したがら、

〈なんだべな〉

と思つたら、ベゴの糞なす、べだぐだべだぐだつて歩いてきたんだど。

「お前だちこれからどごさ行くどごだ」

「いやこれから、山兄のどごやっつけさ行くどごなんだ」

「おらもあの野郎にいたずらされたごどあるがら、助けてけっからよ」
って、べた糞、ほんとうは連れていぐの嫌だったけども、べたら一くたらべたら一くたらと一緒に歩いていったけどすや。

したら、どごまでも行ったらなす、臼が、がだごどがだごど追っかけて来たったすや。

「お前だち、三人でどごさ行くんだ」

って言ったら、

「こうこういうわけで、山兄やっつけさいぐどごだ」

って言ったす。

「いや、おれも助けっ人になるがら一緒に行くべ」

って言ったがらなす、一緒に出掛けていったす。

そして、山兄の家さ着いたらなす、誰もいながったがら、んではというわけで、栗っこ、火ぶどの中さ灰こかぶって入ってらったけどすや。スガリっこなす、水瓶の底さ入ったんだど。びた糞は、びだら一びだら一って、入口のどごさびだあって横になったす。そして、がだごどがだごど歩いてきた臼がなす、むりやりむりやり桁の上さ上がったんだなす。

そしてるうちに、山兄が来たっけどす。

「おお、さむ、さむ」

って帰ってきてなす、火ぶどさあだるべって手かざしたれば、栗っこがば一んと弾けで、顔だが金玉さ当たったけどす。

「ああ、いで、いで」

って言って、水っこで冷やすべど思って瓶のどごさ行ったらばなす、スガリっ飛んできて、ちくちくって刺したったす。

「ああ、いでじゃ、いでじゃ」

って叫んで、そごから逃げべど思って戸口がら出はるべど思って出はったら、ずるりと滑って転んでしまったすや。

そのとき天井にいだ臼がなす、落ちでがっちりとかまえてしまてなすあ、そして仇とりしたんだどやあ。

どんどはらい

(拍手)

小田嶋 — おわかりになったかと思いますが、今のこのお話は、スズメの卵を山兄にとられてしまった仇討ちのお話になるんですね。で、仇を討ったのが、ごんぞの上に落ちた卵が自然に孵ったスズメっこで、クリ、スガリ、蜂ですね、それからベコの糞、べたらべたらっていうベゴの糞の四つの助太刀が出てくるんですね。で、これも「サルカニ合戦」と同じ形をしているお話なんです。では次は、伊藤正子さんという迫町の語り手の方のお話ですが、「ウサギとキジの栗づくり」というお話をします。これもまたちょっと違った形のお話なんです、やっぱり「サルカニ合戦」の形をとっています。

「ウサギとキジの栗作り」伊藤正子さんの語り（宮城県登米市迫町 大正十五年生）

むかあしむかしね、キジとウサギが、畑をね、一枚の畑を共同して作ってだんだど。

「ひとりで仕事すんのひどいがら、二人でしていいものとしてわけんべしやあ」

ってらんだどね。

そしてね、春から一生懸命かがって草をとったり、ほら、種まいたりして、いい粟なつたど。
秋になってね。さあ、いい刈り^{あんべ}按配^{あんべ}だなどと思って、キジが下見に行ったど。

「いつ刈ったらいいがなあ」

と行ってみたら、ぶったまげてしまったんだど。

「あんなにいく粟実ったのにや、さっぱど穂刈^{かだ}られでしまった」。

キジ飛んできたどね、そして、ウサギ^{かだ}さ語^{かだ}つたど。

「いややあ、ウサギどんや。あの粟の穂、全部刈^{かだ}られてしまったでえ。みんな刈^{かだ}られでしまったやあ」
そうしたら、ウサギがね、

「誰もほかから来て刈^{かだ}る人ねえべ、お前^めだべ。キジ、お前^め刈^{かだ}つたんだべえ」

ど責めだんだどね。

「どごに、おれ、刈^{かだ}るもなにもしねっちゃや。ふたりでしたんだもの。下見に行ったんだあ」

って言ったどね。

「なあに、お前^め、刈^{かだ}つたんべ」

ウサギがうんと怒^{おこ}つたんだどね。

「ようし、お前^めどご、今日は切り刻んで焼き鳥にして食うどお」

って言ったど。

「いい、おれ、今がら山さ行って竹伐って串作^めつがら。お前^めだべ」

「どごにい、おれ、そんな悪いごどすねえ」

「お前^めすたんだ、お前^めすたんだ」

って語^{かだ}つてね、ウサギ、鉈^{かた}持って、山さ木^{かた}つ伐^{かた}りに行ったんだど。

キジがね、おいおいって泣いでらど。

そごさ、トチの実が、ころころころころ一おとと転がってきたんだど。

「お前^め、なに^めして泣いでだのやあ」

って聞^めい^めだれば、

「あのねえ、ウサギど一緒にねえ、粟作^めつたんですがす。ほだげっども、刈^{あんべ}り^{あんべ}按配^{あんべ}だと思って下見^めに行ったれば、穂は全部刈^{かだ}られでしまっ^めていっこうになが^めつたんですがす。そうしたらば、『お前^めしたんだべ』ってウサギ怒^{おこ}つて、『今夜焼き鳥にして食う』って、串伐^めり^めさ行^めつたんですがす。おら、今夜殺^めされてしまう」

って、おいおいキジ泣^めいだんだど。そしたら、トチの実、

「ああ、そうが。いい、いい。ほだらば、おれ、そのウサギどご懲^めらしめ^めでやっから。泣^めぐな、泣^めぐな」

って。

そごさカニがね、わっさりわっさりわっさりど来^めたどね。

「あれ、なして泣^めいでる、キジどん」

「いやいや、こういうわけ^めでなあ、粟作^めつたれば、粟の穂全部刈^{かだ}られでらんだ。『お前^めだべ』って言^めわれて、今、ウサギが『串伐^めり^めさ行^めぐ』って行^めつた。おら、ほだ^めがら、今夜殺^めされ^めで焼き鳥にされるう」

って泣^めいだどね。

そしたら、そごさ、牛のべた糞^{わげかだ}と白^{わげかだ}が来^めたど。その理^{わげかだ}由^{わげかだ}語^{わげかだ}つたれば、

「よしよし、ほだらば、みなしてな、そのウサギ懲^めらしめ^めでやんべし」

さあ、トチの実^{あぐ}はね、炉^{あぐ}の灰^{あぐ}さ、火^{あぐ}ある灰^{あぐ}さ入^{あぐ}つてらんだど。カニは水瓶^{あぐ}さ入^{あぐ}つてる、べた糞^{あぐ}はね、戸口^{あぐ}にいだど。そうして、白^{あぐ}は屋根^{あぐ}さ上^{あぐ}つて待^{あぐ}つてらど。

そごさね、竹伐って、ウサギが^{けえ}帰ってきたど。

「ああ、さむ、さむ、さむいー。さむくなつたなあ。さむいー」

って来たど。そして、火焚いでいる炉端さ胡坐をどがんとかいて、串作り始めたど。

さあ、^{まった}股広げでながら、トチの実、ばちーんと撥ねて、ウサギの^{まった}股さ撥ねだつた。したら、

「あっつい、あっつい、あっついー」

って冷やすべって思って、水瓶さ手入れだれば、カニに、ばちって挟まれたど。

「ああ、いで、いで、いでえ」

って、戸口さ来て逃げんべど思ったれば、戸口さいだべた糞、それを踏んづけたがら、べだあつと、はあ、転んでしまつたど、滑ってね。

そごさ屋根にいだ臼あ、ごろごろごろーど落ちできてつかまえだど。

そうしたら、ウサギね、

「今から^{わり}悪ごどしねがら堪忍してけろー。今から^{わり}悪ごどしねがら堪忍してけろー」

とうんとお詫びしたど。

それがらね、ウサギも^{わり}悪ごどしなくなつて、まだキジと仲よくなつて、また畑作ようになったどさ。

えんつこもんつこさげした

(拍手)

小田嶋 — とつてもおもしろいお話でしたよね。さっきはお餅というのが話に出ていましたけど、粟なんですね。畑に作る雑穀で、それを鳥であるキジと地上にいるウサギと一緒に作るというお話で、で、粟ですから穂を刈るんですよ。ウサギの方がたぶん強いんですよ。助太刀するのがトチの実とカニとべた糞と臼、役割としては四つの役割を果たしているんですね。とつてもおもしろいと思います。次はですね、また佐々木健さんのお話で、「カニっことサル」のお話です。これは今度は餅のお話になります。では、お願いします。

「カニっことサル」佐々木健さんの語り（岩手県遠野市宮森町出身 宮城県宮城郡利府町在住 昭和十二年生）

カニっこがいで、そのカニっこが「餅食いでなあ」ど思ったもんだがら、餅搗くべど思って蒸かしたりなんかしてなす。

そごさ、とことことサル来たつたどす。

「カニさんカニさん、お前そこでなにしてだ」

「いや、天気もいいし、ここで餅搗いて食うべど思って餅支度してだんだ」

したら、サルっこなす、

「なに、こつたらどごで餅搗いて食つたつてうまぐねえ。見晴らしのいいどごさ行くべ。おれも手伝ってけっからよ」

したら、臼^{しよ}背負つてがらに、とことこと先に歩き出されたどすや。

「いや、こごでいいがら、こごでいいがら」

って言うのに、先さ立つてとつと歩がれだがらなす、餅搗く支度してなす、よちよちついてつたけどすや。

山の見晴しのいいどごさ行つたら、でんと構えて、

「ここで餅搗いた方がいい」

と言つて、そこで餅搗き始めたつけどすや。して、餅搗いで食うころになつたらなす、そのサルっこ、

「なに、こったなごどで餅食って。遊びっこすべし」

って。

「臼転がして下さ下ろしてやるがら、先に着いた順に食うごどにすべじゃ」

「そったらごと考えたらだめだ、だめだ」

って言うの、われ元気いいのだから、どーんと、臼、突っ込んだぞ。したら、臼、ごりーんごりーんごりーん、ごろんごろんごろんと下っていったぞすや。

「早いもの勝ちだ」

って。

それ追っかけて、サルはいっしょうけんめい跳んでいったっけぞすや。カニは仕方ねがら後ついで、どたどたどたどた行ったけぞすや。

しったっけ、ごろごろ臼転がって、餅なもんだがら臼がらはずれで、ぼーんと木っ株さくっついってしまったぞす。

サル知らねもんだがら、いっしょうけんめいになって川の近くまで山がら落ちできてなす、食うべど思って見たらば、なにも入っていながったぞすや。

〈なあんだ、これ、どごさ行ったべ〉

ど思って、サル

「ごごにもねえ、ごごにもねえ」

って行ったけぞすや。

ところが、カニが、後がらべえっこ歩いてきたらばなす、木っ株さ餅引っ掛かっていたぞす。

「ああ、いがったじゃ」

って、そこで、ずわりずわり食っていったぞすや。

「うめえ、うめえ」

って。そごさサル来て、

「なにお前、ひとりで食ってわねんだぞ。おれさも食せろ」

「お前さなど食せるのね」

「いや、そごの埃っこついだのでもいいがら食せでくれ」

したら、カニも、

「なに、こいなもの、ふっぱりふっぱりして食えば食うにいいがら。これでも顔さ食せろ」

って中心の小さいやづちぎって投げられたら、ほっぺさ当たったぞすや。

「いでいでー」

ってほっぺ赤くなつたぞすや。

「こいづもけっからよー」

って投げられたら、顔赤くなって、それがら尻さぶっつけられだりなんかしたっけぞす。

「おれさ食せてくれえ、食せてくれえ」

っても、食せてもらえながったぞすや。

サルっこがなす、

「なんだ、この野郎」

って、本気になって、カニどご叩き殺してしまったんだぞすや。可哀想になす、残された子ガニっこ、いっばいだつたぞす。

「サルっこにいたずらされたんだあ」

「なにしてこつたらごどになったんだあ」

って言ったら、

「したら仇とりにいがなげない」

ってごどになって、仇討ちするごどになったんだどすや。

それで、ほら、スガリっこから手伝いをもらってやつつけさ行つたつけどすや。そしてさっき（一回目に話した「スズメっことサル」の話）みたいな仇討ちやつたんだどすや。

「可哀想だな、やつつけっぺ。なにこつたなものやつつけんにいいんだ」

って、サルこのごどやつつけてなす、サルどご押しやえつけてなす、天井がらごろつと落ちた臼の下になつて
いるどごさ、

「親の仇とれえ、親の仇とれえ」

って言って、小っちゃい鉄っこ持った子ガニ達が、ずわりずわり出はつてきてなす、サルの首つたっこ、ちょきり
ちょきり挟んで仇とつたんだどや。

どんとはらい

(拍手)

小田嶋 — 本当にすごいお話ですよ。おわかりになったかと思うのですが、小野先生の先程話題提供に出てきた一番古い形と言われている「餅争い」から始まって、そこで殺されたカニが助太刀をもらってサルをやっつけるという、これがそのお話なんです。最初の「餅争い」のところは、語る方はいっぱいいるんですが、それが「サルカニ合戦」に結びついていくのは珍しいのではないかと思うんです。本当に古い形なんだそうです

で、もうひとつ、最後に伊藤正子さんの「餅争いのお話」。「サルとフルダの餅争い」のお話、お願いします。

「サルとフルダの餅争い」伊藤正子さんの語り（宮城県登米市迫町 大正十五年生）

むかあしむかあしね、秋の日になってね、田んぼのイネもみんなさっぱど刈られたど。そうしたらね、サルがね、フルダのとこさ来だど。

「フルダどーん、フルダどーん、なにしてるー」

「なあにもしてねえ」

そしたらね、サルがね、

「いやあ、田んぼのイネみな刈られたがら、落穂拾いさ行がねがあ。落穂落ちでつとお」

「ほだなあ。んで行くがら」

大きな袋持ってね、サルとフルダが田さ行つたど。そうして、一生懸命拾つたど。袋さいっぺになつたどね。そしたらサルがね、

「いやあ、この、モミ干して餅搗いで食^かねがあ」

と言つたどね。

「ほだな、餅搗いで食うべえ」

って、そのモミをなんとか挽いてね、米にしたど。まあず、といで、うるがして、餅、べつたんべつたんとサルが搗いだど。フルダがべつたりべつたりかえしたどね。そしたら、うめそうな餅がいつぺえ出だどね。

ところが、サルね、

「いやあ、こんなうめそうな餅、ふたりでわけで食うど半分になつてしまう。ひとりで食いで」

と思ったんだよね。

「フルダどん、フルダどん。この餅わけで食うのでなくや、この臼がらみ山がら転がして、先に見つけた方がこの餅食うごどにしねがや」

って言ったど。

フルダ、なんぼしたってサルのかれえ走られねがら、

「やんだやんだ。おらはそんなごどしねで、いいがらわけで食うべしや」

って言ったど。

「んだげっどや、ただ食ったっておもしろくないっちゃや。先に見つけた方がみな食うごどに、見つけね方が食れねごどにしねが」

「だめだ、だめだ。そんなごどしたって、それはだめだ。わけで食うべし」

なんぼお語っても、サルはきかねがったど。

そうして、べったんべったん搗いた餅をね、臼さ入れたまんま山さ持って行って、高いどっから臼がらみごろごろごろ一転がしてやったど。そしたら、途中で口が下の方になって、餅がすっかりぺたっと落ちてしまったど

臼だけがごろごろごろ転がって、谷まで行ってしまったどね。

そんで、サルは、速い速い、ぼんぼんぼんぼん撥ねで谷まで行って、

〈ああ、おれひとりして食うにいい〉

ど思って、臼、ひっくり返してみたら空っぽだったど。

〈あれや、餅いっこうねえっちゃや。どごさ行ったんだ〉

ど思って、いっしょけんめえ駆け上がってきたど。

あどがらべったりべったり行ったフルダがね、木の根っこさ引掛かかってだ餅見つけたど。フルダがひとりでうまそうに食ってたんだどね。サル、そいづ見つけて、

「フルダどん、フルダどーん。おれさもいいがらや、べえっこでいいがらわけでけねがぁ」

「だめだ、だめだ。お前が語ったんでないのが。先に見つけた人が食うって。だめだだめだ」

「いいがらやあ。おれさもべえっこでもいいがら食せでけろー」

ど言ったど。

フルダ、とうとう食せねでしまったど。

えんつこもんつこさげすた

(拍手)

小田嶋 — これもすごくいいお話ですよ。これは「餅争い」だけのお話で、「餅争い」のなかに、落穂拾いをして、それを粃から米に挽いて、それをうるかして、なおかつ餅を搗いて、それをフルダが相取りするところまで語りこめられているとてもいいお話だと思います。それから健さんの場合は、「餅争い」はサルとカニだったのが、サルとフルダですよ。でもやっぱり、カニとフルダという水辺の生き物であることは、それは確かなんですよ。ありがとうございました。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

6. 感想や意見の交換 2

小田嶋 — だいたいみなさんにはいろんなお話を聞いていただいたんですけども、それから小野先生からの話題提供がありました。で、今までのなかで特にここがわからなかったとか、それからここをなるほどと思ったとかいろいろあると思うんですが、なんでもいいんで、まずなにか出していただけないかと思うんですが。

参加者(女性) — お世話様です。フルダっていうのは、もともとなんのことかわからないんです。

小田嶋 — フルダというのはカエルのなかでも大きなものを言うんだそうです。ヒキガエルのような。カエルのことをビッキとも言いますしフルダとも言うんですが、そのなかでもビッキは少し小さめのやつ、フルダというのは大きいものだそうです。ガマガエルとかイボガエルとか、そういうものをいうんだそうです。

小野 — この話には、正子さんは、この後にもうちょっと続くんですね。どういうことが続くかというのと、「サルはおこって、フルダの背中をぎぎぎって爪で搔いたために、今でもフルダの背中はいぼいぼなんだ」というところが、ちょっと抜けてしまったんですけど、そういういわれ話がつきます。

小田嶋 — それに関してでもいいですし、わからないことでも感じたことでもいいんです、なにか。

参加者(女性) — 私は子どものときにおぼんつあんから昔話を聞いたんですけども、でもそのときには「サルカニ」は聞かなかったんですね。でも、昔話を聞かされるときにいつでも言われていることっていうのは、「お天道さまが見ているんだから、人の嫌がること悪いことすれば、必ずその仕返しがあるんだ」ということが、いろんな話聞いているときに、いつでもそれが普段暮らしているときでもそれを言われたりするものでした。だからそういう思いをしないために、「サルカニ合戦」で、「殺される」ことも削ってしまわないで、人に嫌な思い、悔しい思いをさせないべきだって言っているんだと思っているから、私は語る時、幼稚園だったら「殺す」は使わないけれども、ある程度は話すようにしているんですね。それと同時に、私の母親はまた別な見方をして、悔しい思いしたり恨みたく思ったり殺したく思ったりすることはあるかもしれないが、そんなこと思えば、その悔しい気持ちとか、殺したい、恨みたいという気持ちが自分の一番大事なもののところに跳ね返ってくるもんだがら、そんなことを思っってはだめだっていう、そんなことを一緒に聞かされながら過ごしてきたことを思いながらいました。それから、さっきの「サルカニ」のなかで出てくるカニっていうのは、必ずしも海にいるカニじゃなくて、私は岩手の村というような小さいまちで暮らしたもんですから、私はサルといえば山の沢ガニが出てくるというようなイメージをいつでもしていました。そんななについていうのでもないのですが、手をあげて言いました。

小田嶋 — ありがとうございます。とってもいいことをおっしゃっていただいてありがとうございます。それで今思ったんですけども、なにか人に悪いこと不当なことを仕掛けると、それが必ずどこかで仕返しとして返ってくるということは至極当然な思いで、私、なんで、「サルカニ」の方は、「サルカニ合戦」でなくて「カニの仇討ち」なんだろうなと思ってたんですけども、やっぱりそういう不当なことに対するなにか不条理なことをされたことに対して、もう一回それをひっくり返すようなひとつの話のなかでの正義みたいなのかなあとふと思いました。ありがとうございます。それに関してでもいいですがなにかありますか。

参加者(女性) — 私は山元町からまいりました。山元民話の会です。私自身は、明治生まれの祖母から話を聞き

ました。そのときの最後は、そういう類のお話は、全て「殺した」なんていうことはなかったです。「臼でどさーんと潰された。それで『これから絶対しないがら』って謝った」って終わり方でした。そういう終わり方でないお話にしても、「絶対これがらしないがらって謝って、そして許したんだお」って。で、もうひとつお話したいのは、私の小さなまちは、三・一一でね、六百何人亡くなったんですけど、私の住んでいる所は少し山で陸の方でしたから屋根瓦が崩れたくらいで私は助かったんですけど。私は山下小学校、海辺のいっぱい犠牲者の方で方に第二小学校というのがあるんです。そこは今すっかりないですけど。私は山元町の陸の小学校出身ですから、浜辺の方の小学生に悪口したんです、みんなで。「浜太郎、小太郎、柿食いかた知やねべ。そしたらね、第二小学校の、浜辺の小学校のみんなはね、うんと口惜しがってわたしたちに「陸太郎、小太郎、カニ食うよう知やねべ」って、お互いに罵り合ったんです。思い出します。

小田嶋 — ありがとうございます。すごく貴重なお話だと思います。

参加者(女性) — ここに多賀城の方が浜対山の戦いみたいなお話をなさったとき、私もそれに関してね、話したいと思っていました。

小田嶋 — ありがとうございます。とってもおもしろいですね。

参加者(女性) — リズム感があるでしょ。「浜太郎、小太郎、柿食いよう知やねべ。そしたら団体でかかってくるの。悪口言いながら。「陸太郎、小太郎、カニ食いよう知やねべ」って、かかってくるんです。

小田嶋 — はあ、山手の子どもたちと浜辺の子どもたちが。柿とカニなんですね。すばらしいですね。ありがとうございます。

参加者(女性) — 津波にのまれてしまって、そのね、運動会でも徒競走でも敵だった浜通りの子どもさんたちは、学校ないですから、昔けんかし合った陸の山下小学校に居候して暮らしているんです、仲良く。

小田嶋 — ああ、仲よくね。いいお話ありがとうございます。

参加者(女性) — すみません。楽しいお話、たくさん伺ったんですけども、ちょっと視点がずれているかもわからないんですけども、最初に柴田さんが語ってくださったお話のなかで、サルが嫌なことばかりしますよね。カニに対しての意地悪、四バージョンあったような気がしましたが、私、数えていたんですけども、これって、私も木下順二さんの「かにむかし」で覚えているので、ああ、こんなに四回も嫌なことをするサルってあまり今までなかったんじゃないかなと思って、これを子どもに話してやるときは、年齢にもよるんでしょうけども、自分はどういうふうにしたらいいのかとちょっと考えてしまったんですけど、小野先生のお話を伺えたらと思ったんですがどうでしょうか。

小田嶋 — 柴田さんはどうされていますか。

柴田 — 私、全然関係なく、とよいさんのをそのまま語りたいということです。そうすると、まあ、小ちゃい子どもはね、幼稚園とか小学校の小ちゃい子ども達は、「サルが可哀想だ」と言うんですよ。最後に殺されてしまって

ね、「可哀想だ」と言うんですね。だから、結局、語り手と聞き手の、子どもだろうが大人だろうが、そういう使い分けは、それこそ昔話が何百年と語り継がれて私達にその命を託してきているものを、子どもだから大人だからっていうことは私にはできないんです。そして、実はそれを聞いた子ども達は、「殺す」とか「殺さない」とかを、もっと超えているような気がします。つまりそれは昔話が何百年と伝えられてきた、命のもとを受け取っているような気がするんです。だから、あんまりこだわらないんです。聞き手に全てを託すと。そういうふうな感じです。先程のこともですね、かなりしつこいんですね、サルはね、本当酷いことするし。金玉っていう言葉も禁句になっていたりね、殺すということもそうですけどもね。私は、たとえば博打というようなものね、鬼の話には博打って出てきます、もっともとおおらかに語ったほうがいいんじゃないかと思うんですよ。エネルギーが実はそこに詰まっているんですよね。小野さんは昔話のもっている生命力と言いました。ちゃんと続いてきたと。まさにそこにあるんですね。あんまり余計なこと考えないほうがいいと思うんです。

小野 — 私が柴田さんの語りに惚れ込んでいるひとつは、話そのものに惚れ込んでいる、その話を理屈で分析したり、ここは適当じゃないじゃないかという発想はないんですね。この話を語っているおばあちゃんが好きだ、この語りが好きだ、これをまるごとで語ってみようっていう、私はこの態度が、語るときにともすると忘れられることもあるような気がするんです。理屈が先にきて、これは酷すぎる、これは残酷すぎる、不道德だっていうことをもってくる前に、語り継がれてきた話そのものへの尊敬というか、まるごとで自分がそれを受け入れて、その上で語るという、こういう姿が必要になって思うことがございます。なんか返事になるか。でもね、唾引っ搔けたりおしっこだったりうんちだったりくどいんですね、サルはね、意地悪のやり方がね。青い柿をぶっつけたっていうような木下順二さんのだと単純なんだけど、そこにいくと、とよいばあちゃんのはしつこくやるんですね、サルがね。そのひとつひとつがなんか大事なような気さえるんですよ。今の柴田さんの答えすごくいいと思いました。

山田 — 語り手の方は、残酷な話も艶話も、小さいときから聞いているんです。語り手の方は、そういう話を自然と小さいときから受け入れているんですね。子どもは大人が思っている以上にどんな話でも受け入れることができるんだと思います。私は小学校の教師をしていましたが、子どもたちに話すときは、そのまんま話していました。ただ自分自身に語る力が必要だな、自分自身が未熟だとちゃんと伝わっていかないなと思います。

参加者(女性) — すいません。えーっと、死んでいいんです、最後にね。ただ、自分の口からしゃべるときに、その「殺す」という言葉をどうしても避ける自分があるんです。たとえばですね、家のおばあちゃんはですね、ハエをね、ぱちんと自分の手で叩き潰すんです。私は力は潰しますよ。ハエはさすがにね、手が出ません。そういう感覚的なものです。だから、先ほど「ひしゃげてしまった」とか「潰れた」とか、そういう表現はします。でも、「殺してしまった」という表現は、自分のなかからは出ないかなって。耳から聞いて口から出るわけですよね、だから自分を通り抜けた言葉が出てくるわけですからどうしても使いたくない言葉っていうのはあるんです。別に残酷なことを変えるということをやったわけではないです。ただ自分の感覚としてはそういう言葉を使いたくないなということはあるということをお話しました。

小田嶋 — ありがとうございます。今のお話はすごく大切なことではないかと思いました。話を聞いて、それを自分のなかを通してもう一回人に話すとき、自分の言葉として話すということの意味ですね。どうしても自分としてはその言葉を話せないということは、話せないということが大事なんではないでしょうか。とつても大事にすべきことだと私は思いました。それなりの表現というのは、人それぞれ自分の体を通した表現になっていくので、そ

れでいいのではないかと私は思いました。

河井 — 今日はこうして伝承の語り手の語りを聞きました。今日この会場にですね、定年になってから民話と向き合って一生懸命に今語りを勉強している男性の人がこちらにいらっしゃるんで、その方にですね、伝承の語りを聞いての感想なり、今日どんなふうな思いで長い時間過ごしていただいたのかお話を伺いたいと思います。

参加者(男性) — 語りやってから、まだ本当に三年目に入ったばかりの渡辺と申します。私は民話の語りを、佐々木先生のところで学んで語っているわけですけども、民話のもっているなんらかの、こういう生き方はいいよ、こういう生き方はしない方がいいよとか、そういった民話の奥深さがあるんじゃないかと思って入ったのが、まずはきっかけです。で、今日の話のなかでもすごいたくさん、こういうことをやっちゃだめとかいいとかそういった奥深さがあるんだなというのを、前回の「民話 ゆうわ座」もそうでしたけれども、今回もそういうことを楽しみに、自分のなかにどういうものを秘めながら、わかりながら語ればいいのか、そういうことを少しでもわかればと思って今日も参加しております。本当にいろいろなお話伺ってありがとうございます。

小田嶋 — こちらこそありがとうございます。これから語ろうとしている方になんらかの糧となるもの、技術的なものではなくてなんらかの糧となれば、我々もやっている甲斐があるというものです。ありがとうございます。まだ言いたいという方はいますか。まだまだ時間はあります。ありがとうございます。

参加者 — 本当に今日はありがとうございました。民話が好きで上手には語れてないんですが、民話の本を読んだり話を聞いたときに、「昔の人はこうやって生きてきたんだぞ」って生き方を教えてくれてるんだなって、そのことに感動して昔話を聞いたり本を読んだりして、今日もそんなふうにな、「サルカニ」のお話もね、そういう思いで聞きました。本当にありがとうございました。

小田嶋 — ありがとうございます。今日は県内だけではなくて県外からもたくさんの方に来ていただいています。山形の方ですか。

参加者(男性) — 山形の田川民話の会の佐藤と申します。今日は刺激になったというか、新しいことをたくさん聞いたような気がしておもしろかったと思います。私達、民話を語る時ひとつ言われたのは「原話を、聞いた話を、崩すな。形を崩さないで語れ」ということを先輩の人からすごく言われたような気がするんです。「筋を勝手に変えるな」「変形させるな」ということで、それが民話なんだっていうようなね、覚えたような気がします。ちょっとなんですけど、調べたりすると、「猿婿」なら「猿婿」で、いろんな変形があるんだと、様々な変化を遂げているんだということも少しずつわかってきました。今日の会に参加して、そのことがすごく「ああ」と、こう頷かれるような気がするんです。たとえば田川で一番ポピュラーなのが、「猿婿」があるんですけど、十話とか十五話とか形が違うのがあるというのがわかっていますが、そのことと今日の「サルカニ」のテーマのお話とダブらせたときに、あの「猿婿」のなかにも、後ろに民衆の生きてきた背景とか人々の思いとか、そういうものがうんと詰まっているんじゃないかと感じられてくると、なんか物語の世界をもうひとつ深めていかなければなあと、子どもに語る時にはそのままでもいいんでしょうけど、私達考えるときにはたいへんおもしろい今日の会だったなと、ひと言感想申し上げます。

小田嶋 — ありがとうございます。そう言っただけでこちらもうれしいと思います。「猿婿」もいろいろな

形があるし、いろんなことが語りこめられていると思いますので、そう思って語っていただけるとまた違ったふうになるのかなあと思います。

小田嶋 — 山形だけではなくて千葉からもいらっしゃった方がいますのでひと言どうぞ。

参加者(女性) — 私はただ民話が聞きたくて千葉から来ただけで、みなさん、こんなに熱心に研究したりなんかしているというので、羨ましい気がしますね。私、ただ聞きにきたって感じで来たんです。みんなでこんなに話し合っていて楽しんでらっしゃることはいいことだなあと思うんですね。

小田嶋 — ありがとうございます。聞いて楽しむこともとっても楽しいことですので、これからもやっていきたいと思います。東京からいらっしゃった方もいますので。

参加者(女性) — 東京の東村山市という所から来ました竹本と申します。みやぎ民話の会の活動にすごくひかれて研究をさせていただいているんですけども、みやぎ民話の会が語り手の所に訪れて何度も何度も話し合いを重ねて深めてきたものを、こうやってふらっと立ち寄れる場で、またみなさんと深めていく様子がすごくいい会だなあと、ふらっと寄られた方や若いお母さんとかいろんな方がいらっしゃって、こういう場で民話というものを中心に据えて話し合える場があるというのはすごく素敵なことだなとあらためて感じさせてもらいました。ありがとうございました。

小田嶋 — ありがとうございます。そういう会として続けていきたいなあと思います。

山田 — 山形の阿相さんが、ご自分の所では「スズメの仇討」が語られるということでした。田川民話の会のこちらの方は、小さい頃に昔話を聞かれているということですがいかがですか。

小田嶋 — 筋だけでも教えていただけますか。「スズメの仇討ち」ですか。

参加者(女性) — 「スズメの仇討ち」です。先程の卵のあれと同じです。

小田嶋 — 相手はサルですか。

参加者(女性) — サルです。

小田嶋 — 仇討ちをされるのサルですか。誰が助太刀に来るんですか。

参加者(女性) — 来るのはハチとクリと臼です。そしてやっぱり畳の針、あれもあったようですね。

小田嶋 — 山形にも同じようなのあるんですね。語られてるんですか。

参加者(女性) — 自信はありません。今日参加させていただきまして、私たちもこういう活動をしているんですけども、やっぱりこれから伝えていくためにはただ語るだけではなく、その時代の背景っていうものを私たちも

っとよく知って語るということが心が伝わるっていう、そういうことを今日はすごく感じました。ありがとうございました。

河井 — 佐々木健さんも来られているので、一言何か。

佐々木健 — 今日の話を聞いて、語り手の方であまり小細工しないで、聞いたものを語りとしてに話すのであればなにを話してもいいと思うんです。話す方が、やさしさなんかをもってね、愛情をもって話す分にはどんなことを話しても、子ども達は聞き入れてくれるんじゃないかと思うんです。話すときにどういう気持ちで話すかというそこを中心に考えれば、あんまり「殺す」とか「殺さない」とか言葉の方にとらわれるべきじゃない。それでは、私はみなさんのために「とんび」のうたをうたいます。

とーんび とんび とんび
まーれ まれ まれー
おどごだったら 刀っこけっから
まーれ まれ まれ

とーんび とんび とんび
まーれ まれ まれー
おなごだったら 鏡っこけっから
まーれ まれ

まだあるんですが、このくらいにしときます。(拍手)

小田嶋 — 健さんの「とんび」のうたのファンがぞくぞく増えていますので、恒例になりそうな気配です。ありがとうございました。今日は名残惜しいのですが、そろそろ時間ですのでこのあたりで閉めさせていただきます。本当に答えは出ないんですけども、ただこういう問題がありそうだなあ、いろいろな意味がこめられているんだなあ、これからもみなさんと一緒に私達も考えていきたいと思います。それを気後れすることなく感じたこと考えたことを遠慮することなくみんなで語り合える場がこれからももてたらいいなあと思っています。

(終了)

○諸連絡

吉田 — 民話の会さんからぜひ夏の「民話の学校」について紹介をしてください。

・「第8回みやぎ民話の学校」について紹介

島津 信子(「第8回みやぎ民話の学校」実行委員長)

・せんだいメディアテークからのお知らせ

吉田 絵理(せんだいメディアテーク)

吉田 — 今日はすごく長くもあつという間の時間になったなと思います。みなさんからたくさんお話も聞けたし、小野先生のお話や、こちらの映像ですとか、語りも実際に聞くことができ、ひじょうに有意義な時間だったと思います。今日はこれにて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)